

加古川市所在

白沢放山遺跡 (白沢6号窯)

平成10年3月

兵庫県教育委員会

加古川市所在

白沢放山遺跡 (白沢 6号窯)



遺跡の位置

平成 10 年 3 月

兵庫県教育委員会



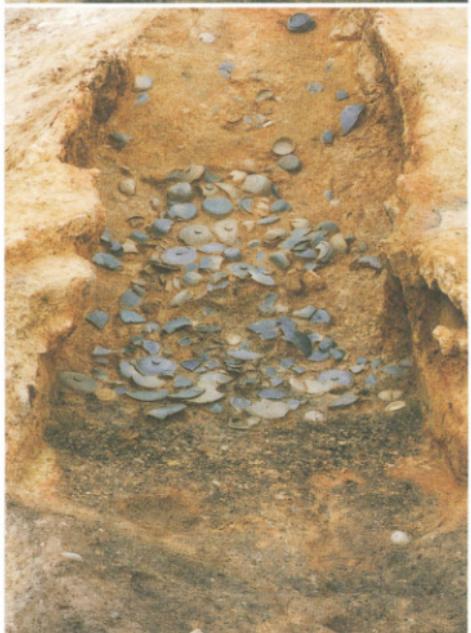
窯 全景
(南から)



窯体内土層断面
(南から)



窯体内遺物出土状況
(南から)



窯体内遺物出土状況
(南から)



1区 SK01 (南から)



1区 SK06 (北から)

カラー図版 4



出土遺物（1）



出土遺物（2）

例 言

1. 本書は兵庫県加古川市上荘町白沢字鳥釜山・放山に所在する白沢放山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山陽自動車道路建設事業に伴うもので、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会が発掘調査を実施したものである。
3. 調査現場での遺構等の実測・写真撮影は調査員および調査補助員が行った。
4. 出土品整理事業は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。
5. 本書の編集は吉澤雅仁が行い、執筆は本文目次に示したとおり分担した。
6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

凡 例

1. 本書で示す標高値は東京平均海水準（T.P.）を基とし、方位は座標北を示す。なお調査値の国土座標は第V系に属する。
2. 遺物には通し番号を付けている。ただし石器にはその頭にSをつけて土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版とともに統一している。
3. 遺構名はアルファベットによる略号と数字を組み合わせて表記する。略号の意味は次のとおりである。 SK：土坑 SD：溝
4. 遺構名については、現地での呼称を以下のように変更して記載している。
5. 第4図の「周辺の遺跡」は、国土地理院 平成3年発行 1/25,000の地形図「三木」を基に、作成している。

白沢放山遺跡 新旧遺構対照表

	旧	新
1区	SK01	SK02
	SK02	SK03
	SK03	SK08
	SK04	SK04
	SK05	SK05
	SK06	SK06
	SK07	SK07
	SK08	SK01
	SK09	灰原内土坑
	焼土溝	SD02
	SD01	流路
	(なし)	SD01

	旧	新
2区	SK01	SK09
	SK02	SK11
	SK03	SK12
	SK04	SK13
	SK05	SK14
	SK06	SK10

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

1. 調査に至る経緯	（中村弘）	1
2. 発掘調査の経過	（中村）	1
① 平成4年度の調査		1
② 平成5年度の調査		2
③ 平成6年度の調査		3
3. 整理作業の経過		3
第2節 地理的・歴史的環境	（中村）	5

第2章 調査の結果

第1節 概要	（吉識雅仁）	9
第2節 遺構	（中村）	10
1. 1区の調査	（中村）	10
① 白沢6号窯	（中村）	11
a. 窯体	（中村）	11
b. 灰原	（吉識・中村）	12
② 土坑	（中村）	13
③ 溝	（中村）	14
2. 2区の遺構	（中村）	15
① 土坑	（中村）	15
第3節 遺物	（吉識）	16

第3章 まとめ

第1節 出土遺物について	（吉識）	21
--------------	------	----

挿図目次

第1図 調査区位置図

第4図 周辺の遺跡

第2図 白沢古窯跡群と山陽自動車道

第5図 地区割図

第3図 遺跡周辺の地形

第6図 窯周辺の出土須恵器

表 目 次

第1表 調査の経過

第2表 整理作業の経過

第3表 周辺の遺跡

第4表 窯体内・灰原出土器間の接合関係

図版目次

図版1 調査 全図

図版2 1区 地形図(調査前)

図版3 1区 地形図(調査後)

図版4 調査区 土層断面図

図版5 窯周辺平面図(完掘状況 最終面)

図版6 6号 窯実測図(1)

図版7 窯実測図(2)

図版8 遺物出土状況(第1面上層)

図版9 出土状況模式図(第1面)

図版10 遺物出土状況(第1面下層)

図版11 遺物出土状況(第2面)

図版12 灰原土層断面図

図版13 1区 SK01・02

図版14 1区 SK04・05

図版15 1区 SK06・07

図版16 1区 SK08・SD01

図版17 2区 地形図(調査後)

図版18 2区 土層断面図

図版19 2区 SK09

図版20 2区 SK10

図版21 2区 SK11~14

図版22 出土遺物(1)

図版23 出土遺物(2)

図版24 出土遺物(3)

図版25 出土遺物(4)

図版26 出土遺物(5)

図版27 出土遺物(6)

図版28 出土遺物(7)

図版29 出土遺物(8)

図版30 出土遺物(9)

図版31 出土遺物(10)

図版32 出土遺物(11)

図版33 出土遺物(12)

写真図版目次

卷頭図版1 窯 全景(南から)

窯体内土層断面(南から)

卷頭図版2 窯体内遺物出土状況(南から)

窯体内遺物出土状況(南から)

卷頭図版3 1区 SK01(南から)

1区 SK06(北から)

卷頭図版4 出土遺物(1)

出土遺物(2)

写真図版1 調査区 全景(東から)

写真図版2 窯 完掘状況(南から)

写真図版3 窯体内第1面 遺物出土状況(南から)

写真図版4 検出状況(南から)

窯体 検出状況(南から)

窯体全貌(南から)

- 写真図版 5 窯第 1 面遺物出土状況（南から）
窯第 1 面遺物出土状況（南から）
窯第 1 面遺物出土状況（南から）
- 写真図版 6 窯第 2 面遺物出土状況（南から）
窯第 2 面遺物出土状況（南から）
窯第 2 面遺物出土状況（南から）
- 写真図版 7 窯体内 1・2 区間土層断面（西から）
窯体内 3・4 区間土層断面（西から）
窯体内 5・6 区間土層断面（西から）
- 写真図版 8 窯体 1～2・3～4 区間土層断面（南から）
窯体 3～4・5～6 区間土層断面（南から）
窯 断ち割り状況（南から）
- 写真図版 9 1. 前庭部灰原断面（5・6 区間）
2. タ（7・8 区間）
3. 灰原断面（6・7 区間）
4. タ（9・10 区間）
5. 灰原横断面（5・8 区間）
6. タ（6・9 区間）
7. タ（7・10 区間）
- 写真図版10 灰原内土掘（北から）
灰原内土掘（北から）
灰原内土掘（南から）
- 写真図版11 SK01出土状況（南から） SK01完掘状況（南から）
- 写真図版12 SK04～07完掘状況（西から）
SK04完掘状況（南から）
SK06土層断面（北から）
- 写真図版13 SK06完掘状況（北から） SK06完掘状況（南から）
- 写真図版14 2 区全景
SK11・12出土状況（西から）
SK11・12完掘状況（西から）
- 写真図版15 SK09出土状況（東から）
SK09土層断面（東から）
SK09完掘状況（東から）
- 写真図版16 出土遺物(1)
- 写真図版17 出土遺物(2)
- 写真図版18 出土遺物(3)
- 写真図版19 出土遺物(4)
- 写真図版20 出土遺物(5)

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

1. 調査に至る経緯

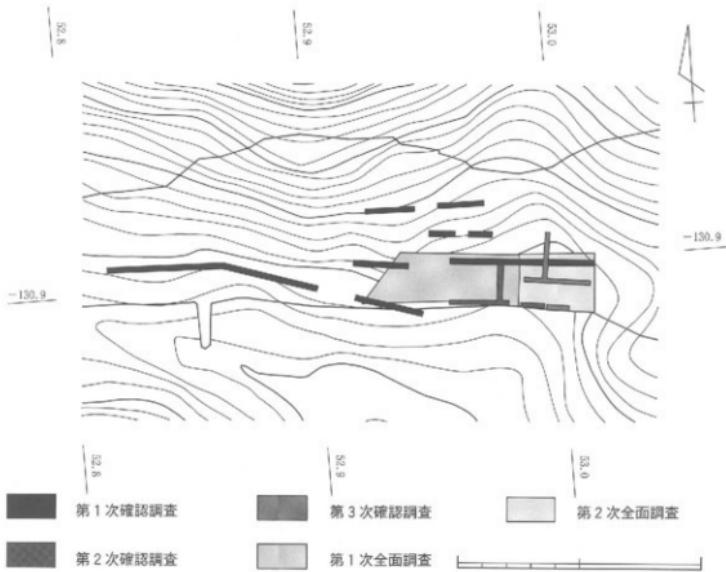
山陽自動車道（三木～姫路）建設事業に伴い、事業者である日本道路公団大阪建設局から遺跡の有無について照会があり、それを受けて兵庫県教育委員会では平成元年度に遺跡分布調査（遺跡調査番号890121）を実施した。その結果、遺物の散布が認められることが明らかとなり、当地点については「山陽自動車道（三木～姫路）No.27地点」として確認調査が必要である旨を日本道路公団大阪建設局に回答した。

2. 発掘調査の経過

①平成4年度の調査

第1次確認調査（遺跡調査番号920304）

分布調査の結果を受けて協議した結果、事業者である日本道路公団大阪建設局から確認調査の依頼があった。それを受けて平成4年度に兵庫県教育委員会が確認調査を実施した。



第1図 調査区位置図

調査は 120×1 mのトレンチを1本、 $60m \times 1$ mのトレンチを1本、 $25m \times 1$ mのトレンチを1本、 $20m \times 1$ mのトレンチを2本、 $10m \times 1$ mのトレンチを2本の合計7本、 $265m^2$ の範囲で行った。

調査の結果、尾根の東斜面から谷底近くにあたるトレンチ2の中央付近で、暗灰褐色の土層が認められ、そこから須恵器が出土した。また、比較的平坦な面が広がるトレンチ1東端、トレンチ2西端、トレンチ5の表土層からも須恵器が出土した。調査地は白沢古窯跡群の中に位置するため、当然窯の存在が想定できたのであるが、この時点では窯の存在が確認できず、窯に付随する工房などの施設が存在するものと想定できたため、全面調査が必要である旨を日本道路公团大阪建設局に回答した。

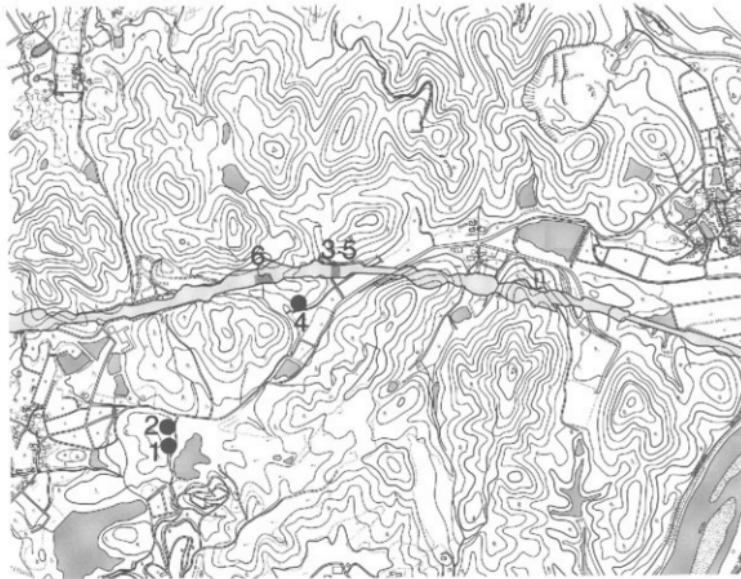
②平成5年度の調査

第1次全面調査（遺跡調査番号930186）

確認調査の結果により窯跡の存在が明らかとなったため、遺跡の名称を地名から「白沢放山窯跡」とした。また、事業者である日本道路公團大阪建設局と協議した結果、事業者から全面調査の依頼があり、それを受けて $1,113m^2$ の範囲について全面調査を実施した。本報告ではこの調査範囲を1区としている。

調査は道路計画に基づく、センター杭、幡杭を利用して調査区を設定し、実測・測量に当たってもこれらの杭を利用している。掘削については機械と人力の両方により行ったが、掘削深度が浅い部分（調査区の西側）については人力のみにより掘削している。

調査の結果、須恵器窯1基、土坑9基が検出された。須恵器窯は、白沢古窯跡群の中の一基であると考えられるため、特に「白沢6号窯」とした。



第2図 白沢古窯跡群と山陽自動車道

また、土坑は調査区東端においても集中して検出されており、遺跡の範囲は今回の調査地よりさらに東側に広がる可能性が考えられた。この場所についても開発対象範囲に含まれているため、さらに詳細分布調査を実施し、遺跡の有無について確かめる必要がでてきた。そこで、事業者である日本道路公团大阪建設局と協議の上、再度詳細分布調査を実施した。調査は等高線に直交したトレチを3か所設定し、機械と人力により掘削した（第1図）。

調査の結果、遺物は出土しなかったものの、全面調査で検出されたものと同様の炭を含む土坑が検出され、遺跡がさらに東側に広がることが明らかとなった。

③平成6年度の調査

第2次全面調査（遺跡調査番号940004）

詳細分布調査の結果を受け、事業者である日本道路公团大阪建設局と協議した結果、事業者から全面調査の依頼があった。それを受けて749m²の範囲について全面調査を実施した（第1図）。本報告ではこの調査範囲を2区としている。

調査は道路計画に基づく、センター杭、幅杭を利用して調査区を設定し、実測・測量に当たってもこれら杭を利用している。掘削については、土砂の堆積が遺構面まで厚く堆積していたため、機械と人力の両方により行った。

調査の結果、埋土に炭を含む土坑が6基が検出された。調査結果の詳細については、第2章以降に譲る。

3. 整理作業の経過

遺物の整理作業については、発掘調査時に監督員誌所において部分的に土器の洗浄を行うことから開始した。本格的な整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて平成8年度～9年度に行い、各年度に取り交わした日本道路公团との整理契約に基づいて実施した。

平成8年度 洗浄・ネーミング・接合補強・実測・復元・写真撮影を実施した。ネーミングは遺跡調査番号のあとに通し番号を付し、内容はネーミング台帳に記載している。

平成9年度 トレース・レイアウト・原稿執筆・編集作業を実施した。

第1表 調査の経過

遺跡調査番号	調査の種別	調査期間	調査担当者		概要
			職員	調査補助員	
920304	確認調査	平成4.11/20 ～5.3/12	西口和彦・森内秀造・仁尾一人		遺跡の存在を確認する。
930186	全面調査	平成6.2/1 ～3/25	吉識雅仁・中村 弘	中北敦子	遺跡名を白沢放山遺跡とする。窯1基（白沢6号窯）と土坑9基が検出される。
940004	全面調査	平成6.5/30 ～6/22	森内秀造・井本有二・仁尾一人		土坑6基が検出される。

第2表 整理作業の経過

作業年度	整理担当者			作業内容
	職員	嘱託職員	日々雇用職員	
平成8年度	吉識雅仁 中村 弘	小川美奈・石野照代・早川亜紀子・中田明美・藏 煙子・宮澤照世・喜多山好子・武田恵美子・島村順子・竹内泰子・茅原加寿子		河上智晴・松本郁美 洗浄・ネーミング・接合補強・実測・復元・写真撮影
平成9年度	吉識雅仁 中村 弘	池田悦子・横山麻子・前田千栄子・吉田優子・香川フジ子		トレース・レイアウト・原稿執筆・縮集作業

第2節 地理的・歴史的環境

白沢放山遺跡は、兵庫県加古川市上莊町白沢鳥釜山・放山に位置する。当地は加古川中流域の西岸にあたり、丘陵が西側から張り出し、川が東側へ大きく迂回するところである。この丘陵の中腹に遺跡は立地しており、標高80mを測る（第4図）。地質的には矢田川・生野・有馬層群にあたる。

当遺跡から東に1.5kmのところを流れる加古川は、北は但馬との国境にある栗鹿山付近から流れ出る佐治川、東は篠山町福住東部の京都府境付近に水源をもつ篠山川等の水を集めて南流し、瀬戸内海へそそぐ、全長86.5kmの兵庫県最大の河川である。また、加古川は本州で最も低い分水嶺を挟んで、北は由良川を経て日本海へと通じている。遺跡は現在の加古川河口から約7kmのところに位置する。

当地域周辺における歴史的な環境は、旧石器時代後期からはじまる。加古川市域では約40箇所の遺跡が知られており、兵庫県下の4分の1を占めるほど集中度が高い。しかし、発掘調査によって明らかとなつたものは少なく、段丘上にある溜池から採集されたものがほとんどで、石器群が明確な資料は今のところ認められない。

縄紋時代では、若干の土器片が出土しているのみである。いざれも縄紋時代後期から晩期にかけての時期であり、そのうち岸遺跡と砂部遺跡では、弥生時代前期の土器も出土しており、縄紋時代晩期から弥生時代前期へとつながる遺跡であると考えられている。

弥生時代に入ると遺跡数は増加する。特に中期から後期に属するものが多く、沖積地ないし低位段丘上に立地している。主な遺跡として東中遺跡、砂部遺跡、東神吉遺跡、溝之口遺跡、美乃利遺跡、下村遺跡などがある。これらの遺跡は弥生時代を通じて存続・展開しており、各水系における中心的な存



第3図 遺跡周辺の地形



第4図 周辺の遺跡

第3表 周辺の遺跡

	遺跡名	概要	遺跡名	概要
1	奥新山西古墳	古墳時代 古墳時代後期、 岩倉古墳群	26 馬背山古墳群	古墳時代 古墳時代
2	人鬼谷山古墳	古墳時代 古墳時代後期、 鰐ヶ原池遺跡	27 白沢西古墳	古墳時代 古墳時代
3	寺谷墓	奈良時代、古窯跡	28 山尾古墳	古墳時代 古墳時代、古窯跡
4	小皿出土	古墳時代後期	29 沢1号窯	奈良時代、古窯跡
5	泡住塗谷遺跡	須恵器等採集	30 沢2号窯	奈良時代、古窯跡
6	泡住塗谷遺跡	須恵器等採集	31 沢3号窯	奈良時代、古窯跡
7	米住城跡	詳細不明、堀等現存	32 沢4号窯	奈良時代、古窯跡
8	石塚遺跡	須恵器等採集	33 沢5号窯	奈良時代、古窯跡
9	陣塚古墳	古墳時代後期	35 (白沢6号窯)	奈良時代、古窯跡
11	常樂寺跡伝承地	詳細不明	36 上原2号墳	古墳時代 古墳時代
12	常樂寺跡遺跡	詳細不明、地磁勢有	37 上原3号墳	古墳時代 古墳時代
13	仲代遺跡	須恵器等採集	38 上原遺跡	奈良時代 古墳時代
14	下栄寺遺跡	須恵器等採集	39 上原古墳	古墳時代 古墳時代
15	下栄寺跡遺跡	詳細不明、堀等現存	40 長池遺跡	奈良時代、古窯跡
16	下栄寺古墳群	古墳時代後期	41 天坊山古墳群	古墳時代 古墳時代
17	住吉神社遺跡	須恵器等採集	42 附上ノ池遺跡	奈良時代、古窯跡
18	市場古墳群	古墳時代後期	43 印旛山古墳群	古墳時代 古墳時代
19	森田高山古墳	古墳時代 古墳時代後期	44 山角施寺	奈良時代、寺院跡
20	森田積石塚	古墳時代後期	45 東山古墳	古墳時代 古墳時代
21	森田六雲台古墳	古墳時代後期	46 谷谷古墓	奈良時代 古墳時代
22	毛無山古墳群	古墳時代	47 斑台古墳	古墳時代 古墳時代
23	カミ焼谷古墳群	古墳時代後期	48 半谷古墳	奈良時代 古墳時代
24	神子谷古墳群	古墳時代	49 楊塵寺山古墳群	奈良時代 古墳時代
25	大谷山古墳	古墳時代		

在であったといえる。また後期には、さらに上流側の小野市域においても遺跡の増加が確認されており、段丘面に立地している高田宮ノ後遺跡、沖積地に立地している船木高町遺跡などが知られる。いずれも、出土する土器には無文化、小型化、壺にみられるタタキ技法の盛行など、基本的には畿内からの影響を受けており、中期に見られた強い播磨色はなくなっている。

弥生時代末から古墳時代に入ると、加古川市ハツ塚古墳群、西条52号墳、神吉山5号墳、小野市船木南山古墳、宮山古墳群など、多くの墳墓が確認されており、古墳時代開始期において当地域が重要な位置を占めていたものと考えられる。

古墳時代に入ると、前期から中期にかけて、5基の前方後円墳を含む日岡山古墳群が、続いて前方後円墳2基を含む西条古墳群が築造される。さらに三木市愛宕山古墳群を加え、いずれも加古川東岸の丘陵に立地しており、古墳の状況からは東岸が優位である傾向を示す。一方、加古川西岸における古墳の分布状況は長慶寺山古墳群、天坊山古墳などを挙げるのみで、散在しており、東岸とは対照的である。

後期になると、古墳がが多く、群集して築造されるようになる。加古川市内では、日岡山古墳群に約20基、西条古墳群に約30基、平荘湖古墳群に約70基があり、三木市から小野市にかけて分布する櫻山古墳群は約150基が群集する。主体部は横穴式石室以外にも木棺直葬が多く認められる。白沢放山遺跡周辺においても、カヌモ谷古墳群、神子谷古墳群、山尾古墳のように、この時期になってようやく墓地として土地が利用されるようになったことがわかる。

また、加古川中・下流域は石棺材として全国的に流通している竜山石の産地でもあり、加古川下流域だけで身と蓋を合わせて約160例が確認されている。

一方、集落遺跡については溝之口遺跡、砂部遺跡などで確認されているのみで、詳細は不明である。しかし、溝之口遺跡からは瓦造り工房とも考えられる住居跡が検出され、砂部遺跡からは朝鮮半島との関連を示す遺物が出土しており、注目される。

飛鳥から奈良時代には、小野市域に河合磨寺、広渡磨寺、大寺磨寺が、加古川市域に西条磨寺、石守磨寺、野口磨寺、中西磨寺、山角磨寺の各寺院が造営されている。また、溝之口遺跡からは奈良時代後期から平安時代前期の遺構として、掘立柱建物38棟、溝17本、橋2列、井戸2基、水田跡などが検出され、官衙跡と推定されている。

瀬戸内海沿いには、古代山陽道が通り、賀古駅家が置かれていた。現在は播磨国府系瓦が出土する古大内遺跡がこれにあたると考えられている。

また、奈良時代から平安時代にかけては、白沢放山遺跡を含む白沢窯跡群とその周辺の磐乙ヶ平池遺跡、寺谷窯のはか、志方窯跡群など、加古川市北部や加西市南部の丘陵地帯で、須恵器生産が行われるようになる。

中世の調査された遺跡として、大国山遺跡がある。ほとんどが蔵骨器に火葬骨を納めた中世墓で、方形区画の墓である。また、城跡として、14世紀後半から15世紀のころに築造されたといわれる中道子山城跡がある。加古川市教育委員会の調査の結果、この地方で最大の城域であることが確認された。白沢放山遺跡周辺にも多久居跡があるが、詳細は不明である。

〔参考文献〕

藤本誠一・松下藤「日本の古代遺跡」3兵庫南部 1984年

兵庫県加古川市「加古川市史」第一巻本編Ⅰ 1989年

兵庫県加古川市「加古川市史」第2巻史料編Ⅰ 1996年

加古川市教育委員会「新発見 加古川の考古学～近年の発掘調査を中心として～」加古川総合文化センター博物館録 1997年

小野市教育委員会「小野市遺跡分布地図－小野市内遺跡詳細分

布調査報告書－」1992年

加古川市教育委員会「加古川市遺跡分布地図」1994年

第2章 調査の結果

第1節 概 要

遺跡は白沢集落の西方、東に開口する東西走行の狭小な谷に面した斜面に位置している。遺跡周辺は強風化層と崖錐性堆積物からなる地形である。そのため、土砂崩れの頻発する地域であり、土砂崩れのたびに新たに小さな谷部が形成されるとともに、谷部を埋めていくという自然作用が起こっている。本遺跡においても同様の作用が起きており、調査区西端には斜面に削り残されたような小尾根が残り、谷が厚い土砂の堆積によって埋められた部分がみられた。

調査区の地形は、大きく東西走行の谷に面した南東斜面と谷に突き出した尾根の西斜面、そしてその変換点に形成された谷部に分かれる。第1次全面調査の調査区(1区)は南東斜面を対象に、第2次全面調査の調査区(2区)は谷部と西斜面を対象に実施している。

1区は西端に小さな突出部が残り、この突出部上から白沢6号窯と呼ぶ窯跡とそれに伴う灰原や土坑が検出されている。突出部頂部の幅は約10mを測り、東側の斜面とは約2mの比高差を測る。突出部の東西端は浅い谷が形成されており、東側には小規模な流路が形成されている(窯東側流路)。さらに突出部の南側にも小さな3本の谷が形成され、調査にあたっては西側谷部・中央谷部・東側谷部と呼んだ。西側谷部は突出部西側の谷部に連続し、東側谷部は灰原を削り取っている。突出部の東側は傾斜変換点の谷部までは平均的に傾斜する緩い斜面となって、東端の傾斜変換点の谷部に近い部分から炭化物を多量に含む土坑が検出された。

2区は背後の丘陵に連続する急傾斜の斜面、そこから谷部に向けた緩やかな斜面、傾斜変換点の谷部からなり、遺構検出面まではぶ厚い堆積層が認められた。この地区からは炭を含む土坑が4基検出されている。

検出された遺構は白沢6号窯と呼ぶ窯跡1基とそれに伴う灰原と土坑1基、炭化物を多く含む土坑8基、溝2条であり、窯跡及びそれに伴う土坑などは調査区西端の尾根部で、炭化物を含む土坑などは傾斜変換点の谷に面した地区で検出されている。

遺物は窯跡に伴う須恵器を中心とした土器や溝などから出土している。出土した遺物には須恵器杯A・杯B蓋・杯B・碗・鉢・高杯・瓶・壺等があり、多種にわたっている。しかし、壺等の大形土器は極めて少なく、杯類の小形供膳形態のものが圧倒している。

遺物の時期については後述するが、飛鳥IV～V型式段階のものがほとんどである。ただ2区の覆土から中世に位置付けられるものが1点出土している。

第2節 遺構

調査は西側と東側のそれぞれ1区と2区の2次にわたって行われ、その結果、須恵器窯1基、土坑15基、溝2条が検出された。

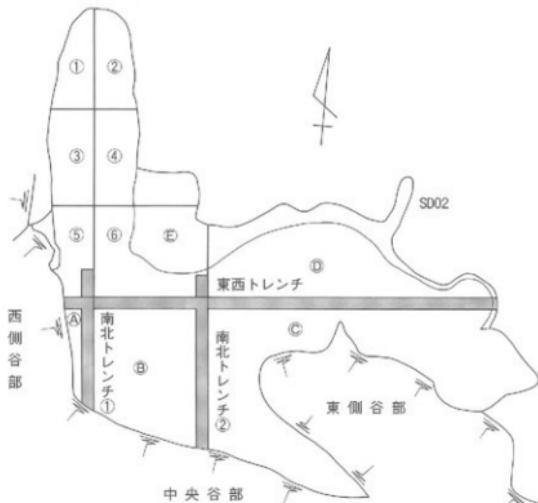
以下、各地区ごとに分けてそれぞれの遺構について記述する。

1. 1区の調査（図版2・3）

丘陵の南斜面に位置し、調査地の西端には低い尾根が認められる。検出された遺構は須恵器窯1基、土坑9基、溝2条である。窯は調査区の西端の小尾根上に位置し、土坑は1基が灰原東端、3基が同じ尾根の東斜面に位置している。他の5基の土坑は調査区東端の南に面した広い緩斜面に立地し、窯付近の土坑とは約15m離れている。窯の西側については、地形が大きく改変されているため、他の遺構が存在したかどうかについてさえ明らかでない。

土層を観察すると（図版4）、調査区のほぼ全面に平均30cmの極細砂から粗砂（図版4の2層）が認められ、一度の大規模な堆積のために調査区が覆われた状態が観察できる。この層の下にはさらに小規模な極細砂の堆積があり、その下に土壤化した層（同図の5・8層）が認められたが、これらの層は調査区の西端にある尾根上には認められず、そこでは地山の上に2層が堆積するのみである。窯はこの2層の下で検出され、地山を掘り込んで構築されている。他の遺構は、土壤化した5層・8層の上で検出された。

遺物は確認調査で出土した1点の石鏃以外は全て須恵器で、窯体内及び灰原を中心に出土している。土坑、溝、及び包含層からも須恵器が出土しているが、点数は少ない。



第5図 地区割図

①白沢6号窯（図版5）

半地下式の登窯で、丘陵の南斜面から南向きに派生する小尾根の先端付近に立地する。周囲の削平、および崩壊のため窯体の上半部、煙道および灰原の大半が失われている。窯体長は4.5m、窯体幅は煙道付近で1.0m、燃焼部付近で1.4m、最大幅は窯体中央付近で1.6mを測る。高さは現状で0.7であるが、天井部が崩壊しているために本来の高さは明らかではなく、壁面の傾斜などを考慮すると当初は燃焼部付近で1.2mほどの高さがあったものと推測される。

また、窯の燃焼部には改修・補強した部分が認められる。

灰原は窯の南側において認められたが、灰原の西側と南側は擾乱のため残存状況は良くない。灰原と関連する可能性のある土坑、溝が検出されている。

a. 窯体（図版6・7 写真図版4・5・6・7・8）

床面

燃焼部付近より緩やかに傾斜し、上半部で急に傾斜を増しながら、煙道部へと反り上がった形態を呈している。燃焼部での傾斜は0°、窯体での傾斜は28°である。煙道付近において一部貼り床が確認されており、貼り床が行われる以前の「第1次床面」（調査では2面目に検出されたため、本報告では第2面とする）と、貼り床された後の「第2次床面」（調査では1面目に検出されたため、本報告では第1面とする）の2面が確認できた。

また、床面の上においても床面の下においても柱穴などの痕跡は確認できなかったため、天井、窓壁の構築にあたっては、支柱状の施設はなかったものと考えられる。ただし、壁面や天井部の一部と思われる窓壁片に直径2~3cmほどの細長い空洞が認められることから、窓壁、天井部の構築にあたっては直径2~3cmほどの木製の枠組みを芯として使用し、その上にスサ入りの粘土を貼り付けることにより構築されていたものと推測できる。

壁面

確認できた部分では、地山を最大80cmほど掘削することにより窯体の下半部の壁としている。上半部についてはスサ入りの粘土により構築されている。また、下半部についても部分的にスサ入りの粘土により補修されている箇所があり、特に南側の燃焼部付近ではほとんどの部分の壁面がスサ入りの粘土により構築されている。

拡張・補強（図版6）

燃焼部では2度の拡張・補強がされているのが確認された。窯は当初、図版6の赤色部分であったと考えられ、鍵状に開く段が認められる。段は高さが20cmほどあり、下側には灰原が形成されている。この灰原からも須恵器や炭が若干はあるが出土しているが、いわゆる灰原というほど炭や須恵器の入り方は多くなく、あるいは窯の築造に伴う何らかの施設であった可能性もある。この段の下場と最終床面とのレベル差は約50cm近くあり、改修であるとすれば、かなり大規模なものであったと考えられる。

その後、図版6の青色部分まで拡張され、さらに下方に段ができる。この段の上方にも「ハ」の字状に開く段が認められ、東側には、前述した薄い灰原に粘土を貼ることにより壁面とした部分が認められる。この段階で、窯の床面は最終床面と同じになる。その後、さらに図版6の黒色部分まで拡張されている。

出土状況（図版8・9・10・11 写真図版5・6）

遺物は第1面上から多数出土しているが、本来の位置を留めるものは燃焼部付近のものに限られ、ほとんどは上方からずり落ちた状態で出土している。特に、坏B蓋と小型の坏Aが焼成部の南端に、まとまった状態で床面に密着し、ほぼ完形に近い状態で出土している。坏B蓋はいずれの個体も身をセットにせず、直接床面に置かれ、燃焼部との境を描えるようにして、約8個体（57・77・80・88）が敷き並べるように置かれていた。小型の坏Aは、坏B蓋の隙間を埋める様にして置かれており、特に窓壁付近に7個体がまとまっていた（27・39・40）。

この他に多数の須恵器が出土しているが、そのほとんどが旧状を留めておらず、破片の状態で上方からずり落ちた状態で出土している。

第2面に伴う須恵器は旧状を留めた状態で出土しているものではなく、第1面の貼り床に埋め込まれる形で数点の須恵器が出土しているのみである（図版11）。

b. 灰原（図版5・12 写真図版9）

旧道、砂防施設により南側と西側が大きく削平されており、遺存状況は良くない。特に南端について砂防施設のためにかつての堆積層は大きく攢乱・削平されていた。

また、灰原と関係する可能性がある遺構として、土坑（灰原内土坑とする）とSD02がある。灰原内土坑については、灰原との関係からこの項で記載するが、SD02については関係が明らかでないでの、溝の項に後述する。

灰原（図版13 写真図版10）

窯体の前庭部から東側にかけての南北約6m、東西約7.6mに広がり、西側は砂防工事によって、南側は道によって削平されていた。道の南側にも灰原が広がっていたようであるが、砂防工事によって

第4表 窯体内・灰原出土土器間の接合関係

実測番号 (報告番号)	窯内		灰原層								その他 SK01					
			上層		炭		E区		B区		C区		CD			
	1面より上 窯内 埋土	1面 焚口 上層	1面	2面	上層	1層	2層	3層	4層	5層	3層	4層	上層	3層	4層	2層
144(212)	●								●	●					●	
243(204)	●								●							
244	●								●							
143	●					●			●	●						
149	●								●	●						
217		●								●						
247		●			●				●			●				
224		●								●	●					
198		●										●				
199						●				●						
120							●				●					
245									●	●						
134									●	●						
141									●	●						
220									●	●		●				
238										●					●	
165										●	●					
193										●	●					
195										●	●					

擾乱され、本来の堆積状況を失っていた。灰層は最も厚い部分で約20cmであり、堆積状況から窯体の焚口から前庭部に連続する灰層（図版12第2・3層）と窯東側の段下の灰層に分けられたが、両層から出土した土器に接合するものが認められている。

灰原内土坑（図版5 写真図版10）

灰原の東端において、灰原と接する様にして検出された。長径1.9m、短径1.5mで、平面形は円に近い。深さは0.5mを測る。埋土は、純粹な炭からなる層が2層（図版5の第4層と第6層）認められ、その間に地山の自然堆積層である第5層を挟んでいる。その上層には、やや炭を含んだ第3層が堆積し、やがて炭を含まない第1・2層が堆積して、土坑は完全に埋没している。すなわち、この土坑は灰原が形成される直前に掘削され、間を空けた2回の炭の堆積が観察でき、窯の使用された回数をある程度反映しているものと考えられる。

また、灰原の東側の上方に溝SD02が検出された。灰原の上端を区切る段に当たってなくなっている。この溝は周囲が焼けており、赤化している。中からは破片ではあるが、須恵器も出土している。

②土 坑

合計8基が検出された。前述したように窯の東側に位置する3基と、調査区の東端に位置する5基の2群に分かれる。ほとんど土坑において炭が確認でき、形の残ったもの、純粹に炭のみで構成されるもの、炭が混じるもの、など、その程度は様々である。

窯の東側に位置するSK01からSK03は、土坑の長軸方向を南北方向で描えており、一列に並んで検出されている。一方、調査区の東端に位置するSK04からSK08は、ほとんどが土坑の長軸方向を北東—南西方向で描えており、並列に並んで検出されている。

SK01（図版12 写真図版11）

平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸3.9m、短軸1.0m、深さ0.2m、長軸方向での床面の傾斜は4°、比高差は0.53mを測る。断面形は皿状を呈する。炭の遺存状況が他の土坑に比べて良好で、組まれた状態で検出された。南側では短辺側に沿った状態で、その両端では長辺に沿った状態である。埋土にはいずれも炭が含まれていた。

SK02（図版13）

平面形は隅丸の長方形を呈すが、南東隅が若干外側に膨れている。長方形の部分は長軸3.6m、短軸1.7m、深さ0.2m、長軸方向での床面の傾斜は5°、比高差は0.72mを測り、突出部は長さ0.7m、幅0.9m、深さ0.13mを測る。断面形は幅の広い逆台形を呈する。埋土は下層において炭を多く含んでいた。

SK03（図版3）

遺存状態が悪く、山側が半円形に陥んだのみであった。検出状態での平面形は半円形で、幅2.0m、高さ0.7m、深さ0.44mを測る。埋土には炭が含まれていた。

SK04（図版14 写真図版12）

平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸2.3m、短軸1.1m、深さ0.05m、長軸方向での床面の傾斜は3°、比高差は0.11mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土には炭が多く含まれており、土坑の底では赤化した状態が確認できた。

S K 0 5 (図版14)

平面形は細長い溝状を呈しており、長軸4.5 m、短軸1.4 m、深さ0.1 m、長軸方向での床面の傾斜は5°、比高差は0.32mを測る。断面形は皿状と呈する。土坑の南側にはさらに橢円形の窓みがあり、その規模は長軸1.1 m、短軸0.3 m、深さ0.2 mを測る。断面形はV字状を呈する。埋土に炭は含まれていなかった。

S K 0 6 (図版15 写真図版12・13)

平面形は隅丸の長方形を呈しているが、南西側が外側に突出している。長軸5.3 m、短軸2.0 m、深さ0.2 m、長軸方向での床面の傾斜は7°、比高差は0.6 mを測る。断面形は幅の広い逆台形を呈する。突出部の長さ0.5 m、幅0.7 m、深さ0.22mで、隅丸長方形部分の底とは4 cmの比高差があり、突出部の方が高い。床面および壁面の一部が赤化しており、特に北側と南側の両端において顕著に検出された。埋土の下層には炭層が9 cm堆積していた。

S K 0 7 (図版15)

平面形は細長い半月状を呈しているが、削平のためか遺存状況は悪い。現存する部分は長軸3.0 m、短軸1.6 m、深さ0.1 m、長軸方向での床面の傾斜は3°、比高差は0.12mを測る。断面形は細長い三角形を呈する。埋土には炭が含まれていた。

S K 0 8 (図版16)

平面形は隅丸の正方形に近く、対角線が南北方向を向いている。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.3 mを測る。断面形は逆台形を呈する。S D 0 1 の底で検出されており、土層の堆積状況から同時に掘削され、埋没したことが明らかである。埋土の下層には炭層が12cm堆積していた。

土坑の西側からは径18cm、深さ17cmのピットが検出されているが、その性格は不明である。

③溝

溝2条が検出された。溝は、調査区の東端に位置しているS D 0 1 と、灰原の東側上方に位置するS D 0 2 がある。

また、調査区の中央において窓と平行した南北方向の溝状の流路が検出されているが、地形的な要因による自然流路と考え、人為的なものではないと思われる。

S D 0 1 (図版16)

東西方向を向き、等高線に平行している。山側が若干掘りく窪められたのみで、底は平らである。幅1.3m、深さ0.15mを測り、断面形は細長い皿状を呈している。東端ではさらに窪められており、2区のS K 0 9 につながっている。

溝の底から、先述したS K 0 8 とピットが検出された。土坑については土層の堆積状況から同時に掘削、埋没したことが明らかである。ピットの性格については不明である。

S D 0 2 (図版5)

灰原の東側上方で、等高線に直交して検出された。幅0.45m、長さ0.5 m、深さ0.25mを測る。断面形はU字状を呈する。壁面は赤化し、埋土上層には炭が多く含まれているが、下層には炭はほとんど認められなかった。上層からは須恵器も出土している。

2. 2区の遺構 (図版17 写真図版14)

丘陵の南斜面の東端に位置し、調査区の中央付近には南北方向の谷がある。この谷を挟んだ東西の両斜面から土坑6基が検出された。谷の西側に位置する土坑は1区の東端で検出された土坑群から続くものである。

土層を観察すると(図版18)、下層には極細砂～中砂の黄褐色系の層が堆積しており、谷部などの低い場所を埋めている。その後、1区でも認められたような細砂～粗砂がまとまって堆積しており、厚いところでは約150cmに達する。

遺物は須恵器のみで、包含層及び土坑内から若干出土している。

①土 坑

合計6基が検出された。谷の西斜面に位置するSK09と、谷の東斜面に位置するSK10～14の2群に分けられる。前者の土坑は等高線と平行しているが、後者の土坑は等高線と直交している。いずれの土坑の埋土にも炭が含まれていた。

SK09 (図版19 写真図版15)

平面形は隅丸の長方形を呈しており、長軸2.6m、短軸1.5m、深さ0.2m、長軸方向での床面の傾斜は1°、比高差は0.1mを測る。断面形は薄い皿状を呈する。南西壁にはさらに径0.5m、深さ0.1mの窪みがあり、炭を多く含んだ黒色の層が堆積していた。土坑の南側には、1区SD01につながるように平らな部分がある。

SK10 (図版20)

擾乱のために平面形は明らかにできないが、遺存状況から考えて隅丸の長方形を呈するものと思われる。現存で長軸2.3m、短軸1.7m、深さ0.2m、長軸方向での床面の傾斜は7°、比高差は0.33mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土には若干の炭を含んでいる。

SK11 (図版21 写真図版14)

平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸2.3m、短軸1.3m、深さ0.05m、長軸方向での床面の傾斜は7°、比高差は0.28mを測る。断面形は薄い皿状を呈する。埋土には炭が含まれている。SK12と切り合い関係にあり、SK12を切っている。

SK12 (図版21 写真図版14)

平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸3.1m、短軸1.1m、深さ0.05m、長軸方向での床面の傾斜は9°、比高差は0.47mを測る。断面形は薄い皿状を呈する。埋土には炭が含まれている。SK11と切り合い関係にあり、SK11に切られている。

SK13 (図版21)

平面形は不整形な梢円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.45m、深さ0.03m、長軸方向での床面の傾斜は1°、比高差は2cmを測る。断面形は薄い皿状を呈する。埋土には炭が含まれている。

SK14 (図版21)

平面形は隅丸の長方形を呈すると思われるが、擾乱のため明らかでない。長軸方向での現存で長軸1.1m、短軸1.1m、深さ0.1m、床面の傾斜は15°を測る。断面形は皿状を呈する。埋土には炭が含まれている。

第3節 遺 物

1. 概要

出土した遺物は土器類が圧倒的に多く、土器類以外には石器が1点出土している。また土器類では弥生土器、飛鳥時代の須恵器、中世の須恵器があるが、弥生土器、中世の須恵器は僅かで、飛鳥時代の須恵器が大部分を占める。

飛鳥時代の須恵器の大部分は白沢6号窯の窯内や灰原で出土しており、それ以外では、窯東側自然流路と土壌群、調査区中央の自然流路、谷底付近の土壌群からも出土しているが少量である。中世の須恵器は谷底の土壌群を覆う包含層から1点だけ出土している。弥生土器は調査区内と調査区の上方斜面で表面採取された小片で、調査時に出土したものではない。ここでは調査時に自然流路を含めて遺構内から出土した土器を中心に扱い、弥生土器については割愛した。土器の記述は遺構単位に進め、包含層出土のものは最後にしている。

2. 窯体内出土土器

窯内の土器は、最も多くの土器が遺存していた第2次床面、第2次床面に塗り込められていたものを第1次床面、第2次床面の焚口に堆積した灰層内、窯埋土に分けて取り上げている。

第2次床面出土土器（図版22・23・24・25 写真図版15・17）

出土した土器の器種には杯A a・A b、碗A a・碗A b・碗A c、杯蓋B a・B b・B c、杯B、壺蓋、壺A・平瓶があり、他に壺腹、横瓶体部片が出土している。壺腹、横瓶体部片などは焼台などに利用されたものであろう。出土した全ての土器についての個体識別は行っていないため詳細なことは言えないが、図化したもので各器種の構成比率を示せば、いわゆる供舞形態の土器類が95.8%、壺類が4.2%となっており、出土土器からみれば、この窯跡では小形の食器類が焼成されたことが窺える。

また、供舞形態の土器の構成は杯A類56.3%、碗A 2%、杯蓋類33.3%、杯B類4.2%、壺他4.2%であり、杯Bについてはかなり小片も図化したにも係わらず低比率である。他の器種はかなり省略して図化しており、杯Bの占める比率は実態ではさらに低くなっている。その反面、杯蓋は高い比率となっており、極めてアンバランスな器種構成を示している。

杯A 54個体が出土している。器形的には底部が平底となる1~30、丸底となる31~54がある。前者の口縁部の形状は口縁下半が内溝し上半が外反する器形が大半であり、口縁端部が内溝するものは22~26、口縁部が内溝しながらそのまま端部に至る器形は30だけである。底部が丸底のものは口縁部が端部下で外反するもの(31~38)と、中央付近から外反する(39~54)があり、量的には後者が多くなっている。

法量によりA I(口径19~21cm:1~3・7・8)、A II(口径17~19cm:4・5・9~11)、A III(15~17cm:6・12・13)、A V(口径13cm以下:15~54)に分かれれる。器高は大半が3.6~4.8cmであり、当然ではあるが、丸底の器形をもつものが平底の器形よりも高くなっている。

手法では底部外面と底部の周囲に範削りを施すものと、底部外面にナデを施すものが見られる。A I・A II・A IIIでは13以外の全てに範削りが施されている。13は範削り後ナデを施している。A Vは全て範

切り後ナデ調整で、覓削りするものは見られない。また底部内面の仕上げナデも、A I・A II・A IIIでは11・13の2個体に施されていないが、他の12個体は1方向あるいは不定方向に施されている。これに対し、A Vでは仕上げナデは全てに施されていない。

椀 55・56の2個体があり、手法は55の底部外表面が覓切り後ナデ、56の底部外表面は未調整である。

杯B蓋 すべて口縁部が屈曲しない形態のもので、頂部が平らで器高が低く偏平な器形(57~74)、頂部が平らで器高の高い器形(75~80)、頂部が脹らみを持ち口縁部にかけて内湾する器形(81~88)の3種がある。ツマミは中央の脹らみが低く縁も丸みをもつタイプが多く、中央の膨らみは低いが縁が鋭いタイプ(64・66・70・73・85・87)は6個体となっている。口縁端部は短く下方に突出するものと、下方に伸ばされるものが存在する。前者には外下方に開き丸みを帯びるものと、比較的鋭く端部外表面が内傾する面となるものがある。

法量は杯蓋B I・B II・B IIIがあり、B a・B cの2種には各法量が、B bにはB II・B IIIがある。杯B 4個体があり、法量はいずれも杯B II(17~19cm・器高4.2~4.6cm)である。口縁部の下半が内湾し上半が外反する器形(89・90・92)と口縁端部下が内湾する(91)器形とがみられる。調整では底部外表面を覓切り後ナデで仕上げたもの(89・91)、底部外表面から口縁部の下端を覓削りしたもの(90・91)がある。内面の仕上げナデは4個体とも省略されている。

壺蓋 93の1個体がある。天井部が高く、口縁端部は内側に短く屈曲する。天井部の中央を欠いているため、ツマミの有無については不明である。天井部の外面は覓削り。

壺 94~96の3個体がある。94・95は直口壺で、94は口縁端部に内傾する面をもつ。95は体部外表面にカキ目調整が施されている。96は肩部に稜をもつ壺の体部片である。体部が扁平で頸部の基部が細いことから、平瓶の体部と思われる。

第1次床面出土土器(図版25 写真図版18)

窯体の第2次床面に埋め込まれる状態で出土したもので、須恵器杯A(97)・杯I(98)・杯B蓋(99)・杯B(100)がそれぞれ1個体づつある。99の杯B蓋は天井部と口縁部の境に沈線が3条施されている。

2. 窯体埋土出土土器

窯体内からは床面以外に、窯内に堆積した灰炭層や窯の埋土から土器が出土している。

窯内灰層出土土器(図版26 写真図版18)

灰層・炭層及びその直上から出土した土器をここで扱った。須恵器杯A(101)・杯I(102・103)・杯B蓋(104~109)が出土している。杯A及び杯Iの底部外表面は覓きり後、ナデ調整している。杯B蓋の法量は杯B蓋II(104・105)、杯B蓋III(106~108)、杯B蓋IV(109)がある。ツマミの中央の膨らみは低いが縁が鋭い形態(104~107)と、中央の膨らみは低く全体に丸みを帯びた形態(108・109)が認められる。

窯内埋土出土土器(図版26 写真図版18)

須恵器杯A(110~116)・杯B蓋(117)・杯B(118~122)・碗(123)・壺底部(124)が出土している。杯Aには112のように口縁部が斜め上方に大きく開く器形や115・116のように器高の高いものがある。底

部の外面の調整は範切り後ナデである。杯B蓋は杯B蓋Ⅳの117のみである。杯Bには杯BⅡ(118・119)、杯BⅢ(120～122)がみられ、119・121・122の底部外面は範削りしている。118は内面の仕上げナデを省略している。椀123は器高が5cmと高く、内面は丁寧に仕上げナデを施している。124は高台の付く壺底部で、高台は高く、躊躇っている。

3. 灰原出土土器 (図版27・28・29・30・31・33)

灰原からは比較的多くの土器が出土している。器種構成は杯A 29.6%、杯B蓋 39.5%、杯B 3.7%、椀 1%、高杯 3.7%、鉢 2.4%、壺類 14.8%、甕類他 5.3% となっている。窯内と同様に小形供膳形態の器種が圧倒的に多く占め、特徴的なのは杯Bの占める割合が低いに対し、杯B蓋の占める割合が高く、極端な差が認められる。壺類についても長頸壺のような小形の壺が多くなっている。大形の甕類については体部が多く、壺の規模からみてこの窯で製作されたことは考え難い。

杯A 125～148の24個体がある。ただ、125は深い器形であり、底部外面を丁寧に範削りした後、竹管文を施しており、特殊な器形として別に分類されるべきものかもしれないが、1個体のみであり、ここで扱っている。

器形的には底部が平底のものと丸底のものがあり、平底となるものが多くなっている。また杯Hの蓋を逆転させたような器形が133～143の12個体と杯Aの半数を占めている。144は器高が極めて低い器形である。

法量では125が18cmを越し杯AⅡに、126は口径が18cmを越しているが、口縁部が大きく斜め上方に開いており、焼歪によるものであろう。底径からすれば127とともに杯AⅢである。128は杯AⅣ、129～132は杯AⅤである。

手法では、AⅡの125が範削りする以外、他は範切りである。内面の仕上げナデは125・127・128・147・148に施されている。

杯B蓋 内面にカエリがつく形態(152～155)が4個体、カエリを持たず、天井部から内済して口縁部となる形態(156～183)が28個体出土している。カエリをもつ形態はいずれも内面のカエリは浅く、この器形としては最終末のものである。カエリをもたない形態のものには天井部が低く偏平な器形(156～178)と天井部が高く丸みをもつ器形(179～183)が存在しているが、数量的には前者が多く、後者は少ない。前者には極めて器高が低く平底ともとれる159・165・167・168・173・176～178が存在しており、長頸壺の蓋になる可能性がある。口縁部は高さがあるもの(156～169)と断面三角形状に短く折り返したもの(170～178)があり、前者は天井部との境に稜をもつ。ツマミは線を鋭く仕上げたものが多く、縁が丸みをもつものは158のみである。前者には中央が山形に彫られたもの(156・160・171～174)と中央が僅かに彫れたもの(157・159・161～170・175～180)が存在している。183はツマミがつかない。

法量では、カエリがつく形態の蓋には口径18～20cmの蓋Ⅱ(152・153)と口径15～16cmの蓋Ⅲ(154・155)がある。カエリがつかない形態のものには口径が20cmを越す蓋Ⅰ(156・157)、口径が17～19cmの蓋Ⅱ(158～161・170・171)、口径が15～17cmの蓋Ⅲ(162～167・172～182)、口径13～15cmの蓋Ⅳ(168・169・183)が存在し、蓋Ⅱ・Ⅲを中心に分布し、蓋Ⅰ・Ⅳは量的には少なくなっている。

杯B 149～151の3個体が出土している。149・150は杯BⅣ、151は杯BⅤである。いずれも底部は範削

りし、内面に仕上げナデを施している。

椀 145・148・185の5個体が出土している。145・147は底部の中央が膨らみ、笠きり後ナデ調整、146・148は平底で、笠きりのままである。185は低部は平底で、口縁部は直線的に伸びる器形である。

高杯 杯部が184・185の2個体と脚部が186の1個体出土している。脚部と接合できるものがなかったため、器形の全容を知りえないが、杯部は水平な体部から屈曲して口縁部が開き、脚部の剥離痕から、脚部は細い脚柱部になるものと思われる。186の脚部は裾部が大きく開く器形であり、脚柱部は細いものであろう。

鉢 188・189の2個体が出土している。188は小形で口縁部が短く外反する。189は大形の器形で、口縁部が直立する。

壺 長頸壺の口縁部(192~195)と体部(199~203)、短頸壺(196~198)が出土している。190は直口壺あるいは平瓶の口縁部であろう。

長頸壺には口径10cm以下で頸部の細い器形と、口径が13cmを越す頸部の太い器形がある。前者には口縁端部に内傾する面をもつものがみられ、後者の口縁端部は外反する口縁のみとなっている。頸部に凹線を巡らすもの、波状文を施すもの、無文のものがある。体部にも小形と大形のものがみられ、凹線と列点文を施すものと凹線のみを施すものがみられる。

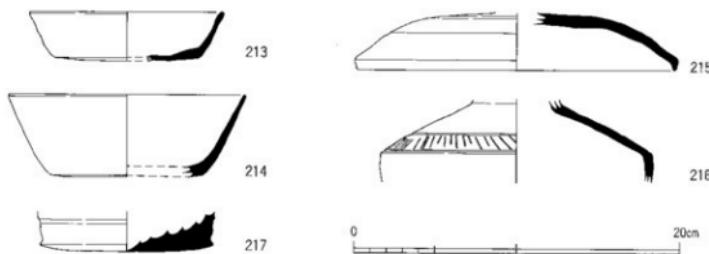
短頸壺は196~198の3個体があり、肩部と体部の境に凹線を施すものと施さないものがある。全容が知りえる198は肩と体部の境に凹線を施し、低部は手持ち笠削りしている。口縁部は内湾するものと直立して端部に面をもつものが存在している。

その他、204は平底で肩部に鈍い棱をもつ。205は体部下端に叩き目を残している。壺の高台には屈曲して端部が外反するものと端部内側を短く下方に突出させたものが存在している。

平瓶 210が出土しているのみである。

横瓶 211の1個体のみが出土している。口縁部は僅かに内側に突出して内傾する面を形成している。外面は格子、内面は車輪文叩きである。窓内部と灰原から出土した破片が接合されたものである。

甕 余容が窓えるものは212の1個体であり、その他は236~243のように破片で出土している。212は体部中央の上側が強く張った器形で、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は内側に突出し、面を形成している。横瓶同様に内面は車輪文叩きである。こうした内面の車輪文叩きは238~243の壺腹片の内面にのみみられ、叩きで整形された土器類に共通してみられる。本窓の特徴である。



第6図 窓周辺の出土須恵器

4. その他遺構出土土器

S K-09 出土土器 (図版32)

杯B蓋と杯Bが出土している。218はツマミの中央が膨れ縁を高く仕上げたものである。219は口縁部が短く三角形状となるもので、天井部と口縁部の境の稜は甘い。220の杯B身は口縁部の下半を箝削りしている。

S K-08 出土土器 (図版32)

221・222の杯B蓋と杯Bが出土している。221のツマミは中央の膨らみが僅かで丸みをもつ器形である。222の杯B身は底部外面から口縁部下端を箝削りしている。

S K-02 出土土器 (図版32)

223の杯B底部片が1個体のみ出土している。底部は箝きり後ナデ調整である。

S D-01 出土土器 (図版32)

杯Aと杯Bのともに底部が出土している。224の杯A底部は底部周囲を箝削りし、225の杯B底部はナデ調整である。

窯東側流路出土土器 (図版32)

杯A(226)、壺蓋(227)、長頸壺(228)、平瓶(229)が出土している。壺蓋は杯Aを逆転させたような形状で、口縁部は短く外反して丸く納められている。長頸壺は頸部の基部が細く、頸部中央に2条の凹線を施している。

5. 包含層出土土器 (図版32)

碗(230)、杯A(231)、杯A(232)、甕(233・234)、鉢(235)が出土している。碗は底部が糸切りで平底である。甕233・234は口頸部が直線的に伸びて罐部は内傾する面を形成している。頸部中央に1・2条の凹線を施している。鉢235は大形で口縁部は体部から横方向に開き、端部は面をもつ。

第3章 まとめ

第1節 遺 物

1. 白沢6号窯跡に伴う土器

(1) 器種構成の特徴

今回出土した遺物量はそれほど多くはないが、220個体を提示できた。それらの器種構成は杯A・杯蓋杯Bを中心とする杯類と椀・鉢・高杯・壺・甌など多種にわたっているが、圧倒的に多いのは杯Aと杯B蓋である。単に掲示したものだけで比較することは難点があるが、総量の内、杯Aは44.1%、杯B蓋は35.1%、杯B 6.4%、椀1.5%、鉢1%、高杯1.5%、壺類6.4%、甌0.5%、その他3.4%となっており、杯A・杯B蓋・杯Bの杯類で85%以上を占め、甌類の占める割合が極めて低い特徴を示す。また、杯類とまとめたものの、杯B蓋と杯Bの割合が極端に異なっているという特徴をもつ。杯B蓋としたものの中に壺蓋が含まれている可能性があるにしても、その量の差は極端である。

窯跡内と灰原に分けて器種構成をみてみる。ただし窯内部と灰原出土の土器で接合できたものは両方に含めて比率を算出している。

まず、窯跡内部は杯A53.5%、杯B蓋31.7%、杯B 4%、椀2%、高杯1%、壺類4.9%、甌1%、その他2.9%となっており、杯B蓋を含めた杯類が90%近くあり、甌が極端に少ない傾向を示している。杯類の中では、やはり杯Bの占める割合が低く、蓋と整合していない。また壺類は灰原出土のものと接合関係があり、完形に近い形で遺存していた杯類とは同様に扱えない可能性がある。

次に灰原から出土した土器の器種構成をみると、杯A 29.6%、杯B蓋39.5%、杯B 3.7%、椀1%、高杯3.7%、壺類14.8%、鉢2%、甌1%、その他4.3%であり、杯Aの占める割合が窯体内の半分近くである。ただ蓋も含めた杯類が72.8%と窯体内に比較すると低くなっているが、それでも高率を占める。杯類の下がった分は壺類の占める割合が増えている。甌は変わらず低比率である。灰原においても杯Bが極端に少なく、杯蓋との関係がアンバランスになっている。

こうした杯Bと杯B蓋の関係にアンバランスが生じる起因としては、杯Bの焼成個数が少量であった、あるいは杯Bが多少の不良品であっても消費地に供給されたといったことが考えられるが、いずれにしても推測の域をでない。

杯A

法量分布では口径15cm以上の群と口径が14センチ以下の群に大別され、15cm以上の群は口径19~21cmのA I、口径17~19cmのA II、口径15~17cmのA IIIに、15cm以下の群は口径13~15cmのA IV、口径10.5~13cmのA Vに細分される。それぞれが杯Aに占める割合はA Iが7%、A IIが10%、A IIIが5%、A IVが4%、A Vが7%となっており、小形のA Vが圧倒的に多い。また、A I・A IIではすべてが底部を窓削りし、内面に仕上げナデを施している。A IIIでは一部に窓削りしたものが認められるが、大部分が窓切り後ナデであり、仕上げナデを省略したものも認められる。A IV・A Vではすべてが窓切りであり、ナデを省略したものも存在する。内面の仕上げナデも省略したものが多い。

器形的には底部が平底に近いものと、底部の中央が彫れ丸みを持つもののが存在し、前者は器高がほ

4cm以下、後者は4cm以上となっている。

杯B

身については出土量は少ないがすでに法量分化がみられ、口径では17~19cmのBⅡ、14~15cmのBⅢ、11cm前後のBⅣの3群が存在し、器高ではBⅡが4.1~4.6cm、BⅢが3.8~4.8cm、BⅣが5cmとなっている。量的にはBⅡが多く、BⅣは1個体のみである。

BⅡ・BⅢの器形は器高の低い器形であり、小形の器形は深い器形となっている。

次に蓋についてみると、蓋には内面にカエリをもつものとないものがあり、カエリをもつものは全て灰原から出土している。窯体内からはカエリがつくものは出土していない。またツマミの形状でも灰原出土のものは中央が彫れ縁を鋭く仕上げたものが多く、窯体内からは中央の彫れが低く縁も丸くなつたものが多く出土している。

法量では口径が13cmから21cmまでの間に分布し、口径が17~20cmと15~17cmの2点を中心としている。前者がBⅡの、後者がBⅢの蓋に想定される。量的には両者がほぼ同数となっている。また口径13~15cmのものや20cmを越すものも少量存在しており、口径13~15cmの蓋はやや差が大きいが身BⅣの蓋に想定される。

窯体内からは口径17~20cmを中心に、16~21cmのものが出土し、灰原からは15~17cmを中心に、13~21cmのものが出土している。

第2節 白沢6号窯の操業年代について

前述したとおり、6号窯の製品は杯A・杯B蓋を中心とした器種構成であり、杯B身が極端に少ない特徴をもつ。この特徴は窯内部からの出土遺物および灰原出土遺物に共通したものであり、窯に2度の修復が確認されているものの、器種構成の点では操業は短期であったと考えられる。

ただ、量の多い杯Aと杯B蓋を窯内部と灰原にわけて比較すると相違が認められる。まず窯内部の遺物では、杯Aは15~29のように底部が平底あるいは平底に近いものと、31~53のように底部が突出して丸みをもち深い器形のものが多く、杯B蓋を逆転させたような杯Aはみあたらない。また口径が15cm以上の杯Aは底部を削りする。杯B蓋では口縁部の折り返しは甘くなり、ツマミは中央の彫らみがほとんどなくなり、全体にシャープさが欠け丸みを帯びるものが多く認められる。灰原出土の杯Aでは杯B蓋を逆転あるいはそこから変化していくような器形が多く、底部が突出して深い器形の杯Aはみあたらない。杯B蓋では内面にカエリをもつものが少数ではあるが存在する。またカエリのつかない蓋では口縁部の折り返しは比較的鋭く、ツマミも中央が彫らみ縁をシャープに仕上げたものが多い。

このように窯内出土の杯A・杯B蓋と灰原出土の杯A・杯B蓋には相違点があり、時期差を示すものと考えている。窯内出土の杯Aの口径15cm以上のものに認められる底部を削りする手法は白沢3・5号窯の製品と共通する。窯内の杯B蓋にはカエリがつくものが存在しないことも3・5号窯と共通しており、窯内部の出土遺物は飛鳥V・平城Iになる可能性が高い。

灰原出土の遺物は杯B蓋に浅いカエリがつくものが存在すること、長頭壺の肩部や頸部に波状文や列点文が施されていることから飛鳥IV形式段階にあたるものと考えられる。

したがって、窯は飛鳥IV段階からV段階にかけて操業し、2度の修復が行われていることから、3回以上の焼成が行われたものとみられる。

遺 物 観 察 表

No	器形	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手 法 の 特 徴	備 考
1	杯A	窯内第1面	21.00	4.05	16.40	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P22 実8
2	杯A	窯内第1面	19.30	3.20	14.80	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P117 実6
3	杯A	窯内第1面	19.30	4.00	14.10	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P164・167 実58
4	杯A	窯内第1面	18.30	4.00	14.30	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P52 生 実9
5	杯A	窯内第1面	17.80	3.80	13.20	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P245 実7
6	杯A	窯内第1面	16.50	3.60	13.05	底部外面範切り後ナデ	P97 生 実41
7	杯A	窯内第1面	19.60	3.70	15.80	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P202・242 実10
8	杯A	窯内第1面	19.00	4.40	14.20	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P84・59生 実12
9	杯A	窯内第1面	18.10	3.90	14.60	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P6・249 実59
10	杯A	窯内第1面	17.80	3.00	14.20	底部外面範削り 内面仕上げナデ	P78・42他 実11
11	杯A	窯内第1面	17.10	3.90	13.80	底部外面範削り 内面仕上げナデ	炊口 実45
12	杯A	窯内第1面	15.70	4.15	12.35	底部外面範削り 内面不定方向ナデ	P252 実3
13	杯A	窯内第1面	15.90	3.70	12.90	底部外面範切り後ナデ	P141 実57
14	杯A	窯内第1面	15.00	4.65	12.20	底部外面周囲範削り中央ナデ内面仕上げナデ	実175
15	杯A	窯内第1面	11.80	3.60	8.60	底部外面範切り後ナデ	P26 実30
16	杯A	窯内第1面	11.60	3.75	8.50	底部外面範切り後ナデ	P10 実22
17	杯A	窯内第1面	11.90	3.70	8.00	底部外面範切り後ナデ	P299 実1
18	杯A	窯内第1面	11.80	3.80	7.70	底部外面範切り後ナデ	P75 生 実34
19	杯A	窯内第1面	11.30	3.65	7.80	底部外面範切り後ナデ	P12 実21
20	杯A	窯内第1面	10.90	3.40	7.60	底部外面範切り後ナデ	P96 実51
21	杯A	窯内第1面	12.95	3.95	9.55	底部外面範切り後ナデ	P20 実27
22	杯A	窯内第1面	12.60	4.00	8.70	底部外面範切り後ナデ	P293・278 実37
23	杯A	窯内第1面	12.75	4.30	9.00	底部外面範切り後ナデ	P19 生 実24
24	杯A	窯内第1面	11.50	3.60	7.50	底部外面範切り後ナデ	P34 実5
25	杯A	窯内第1面	12.20	3.80	8.50	底部外面範切り後ナデ	P276 実38
26	杯A	窯内第1面	12.40	3.50	8.00	底部外面範切り後ナデ	P300 実4
27	杯A	窯内第1面	—	—	7.80	底部外面範切り後ナデ	P234 生 実25
28	杯A	窯内第1面	12.30	3.50	8.10	底部外面範切り後ナデ	面直上 生 実48
29	杯A	窯内第1面	12.90	3.20	7.90	底部外面範切り後ナデ	P133 実36
30	杯A	窯内第1面	12.40	3.60	8.10	底部外面範切り後ナデ	P73 生 実23
31	杯A	窯内第1面	11.75	3.90	7.50	底部外面範切り後ナデ	実16
32	杯A	窯内第1面	11.60	4.05	8.20	底部外面範切り後ナデ 底部周囲のみ範削り	実32
33	杯A	窯内第1面	10.40	4.10	7.50	底部外面範切り後ナデ	P79 実14
34	杯A	窯内第1面	11.20	4.20	8.70	底部外面範切り後ナデ	P36 実26

No	器形	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手 法 の 特 徴	備 考
35	杯A	窯内第1面	11.90	4.00	8.00	底部外面範切り後ナデ	P295 生 実2
36	杯A	窯内第1面	11.90	4.20	7.75	底部外面範切り後ナデ	面直上 生 実63
37	杯A	窯内第1面	12.25	4.15	9.40	底部外面範切り後ナデ	P262 生 実31
38	杯A	窯内第1面	12.30	3.70	8.00	底部外面範切り後ナデ	面直上 生 実56
39	杯A	窯内第1面	11.40	4.70	7.80	底部外面範切り	P244 生 実61
40	杯A	窯内第1面	11.70	4.00	9.20	底部外面範切り	P228 生 実65
41	杯A	窯内第1面	11.60	4.00	8.00	底部外面範切り後ナデ	P176 実42
42	杯A	窯内第1面	11.60	4.45	7.60	底部外面範切り後ナデ	P15 実28
43	杯A	窯内第1面	11.50	4.30	8.50	底部外面範切り後ナデ	P12 実20
44	杯A	窯内第1面	11.20	4.30	8.15	底部外面範切り	P38 実17
45	杯A	窯内第1面	11.80	4.30	8.40	底部外面範切り	P253 実35
46	杯A	窯内第1面	11.70	4.80	8.80	底部外面範切り	P11 実40
47	杯A	窯内第1面	11.40	4.80	8.00	底部外面範切り後ナデ 内面仕上げナデ	P251 実39
48	杯A	窯内第1面	11.60	4.70	8.20	底部外面範切り後ナデ	P268 実33
49	杯A	窯内第1面	11.80	4.20	8.10	底部外面範切り後ナデ	P46・49 実13
50	杯A	窯内第1面	11.85	4.30	7.80	底部外面範切り	P236 実29
51	杯A	窯内第1面	11.90	4.70	8.80	底部外面範切り	面直上 実62
52	杯A	窯内第1面	11.45	4.35	8.60	底部外面範切り	面直上 実55
53	杯A	窯内第1面	11.05	3.90	7.85	底部外面範切り	面直上 実54
54	杯A	窯内第1面	11.20	4.30	8.00	底部外面範切り	P274 実18
55	椀Ac	窯内第1面	11.50	4.25	8.00	底部外面範切り後ナデ	P43 実19
56	椀Ac	窯内第1面	12.00	4.40	7.90	底部外面範切り	P179 実15
57	蓋Ac	窯内第1面	21.00	2.70	—		P241 実105
58	蓋	窯内第1面	20.00	3.30	—	内面仕上げナデ	P176 実100
59	蓋	窯内第1面	20.70	3.40	—		P180 実99
60	蓋	窯内第1面	19.50	2.25	—	内面不定方向ナデ	P302 実86
61	蓋	窯内第1面	19.30	2.45	—	内面仕上げナデ	P192-182 他実84
62	蓋	窯内第1面	19.30	2.50	—	内面仕上げナデ	P281-123 実96
63	蓋	窯内第1面	18.90	2.80	—	内面仕上げナデ	P181-133 実83
64	蓋	窯内第1面	19.00	2.70	—	内面不定方向ナデ	P189 実94
65	蓋	窯内第1面	18.85	2.80	—	内面仕上げナデ	P187-247 実118
66	蓋	窯内第1面	18.40	2.60	—		焚口 実78
67	蓋	窯内第1面	18.40	2.75	—	内面不定方向ナデ	P255 実32
68	蓋	窯内第1面	18.20	2.80	—	内面仕上げナデ	P92 実87
69	蓋	窯内第1面	18.20	2.10	—		P98 実79
70	蓋	窯内第1面	18.20	2.95	—		P89-273 実109

No	器形	出土場所	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	手 法 の 特 徴	備 考
71	蓋	窯内第1面	17.90	2.40	—	内面仕上げナデ	P67 実107
72	蓋	窯内第1面	17.40	2.30	—	内面仕上げナデ	P173・157 実115
73	蓋	窯内第1面	16.90	2.40	—	内面仕上げナデ	P156 実203
74	蓋	窯内第1面	16.30	2.35	—	内面仕上げナデ	P59 焼口 実113
75	蓋	窯内第1面	19.10	3.80	—	内面不定方向ナデ	P97・31 実92
76	蓋	窯内第1面	18.00	3.80	—	内面不定方向ナデ	P50 実80
77	蓋	窯内第1面	17.05	3.62	—	内面仕上げナデ	P148 実110
78	蓋	窯内第1面	17.15	3.30	—	内面仕上げナデ	P280 実114
79	蓋	窯内第1面	16.90	3.90	—	内面仕上げナデ	P86・304 他実112
80	蓋	窯内第1面	16.85	4.10	—	内面仕上げナデ	P243 実108
81	蓋	窯内第1面	19.90	3.70	—		P210 実102
82	蓋	窯内第1面	19.20	3.65	—		P51・16 実93
83	蓋	窯内第1面	19.55	3.30	—		P273 実82
84	蓋	窯内第1面	18.60	3.20	—	内面仕上げナデ	P303 実81
85	蓋	窯内第1面	19.50	2.90	—	内面仕上げナデ	P147 実111
86	蓋	窯内第1面	18.40	3.20	—		P271・104 他実104
87	蓋	窯内第1面	18.90	3.60	—		P37・304 実101
88	蓋	窯内第1面	16.00	2.80	—	内面仕上げナデ	P217 実98
89	杯B	窯内第1面	18.20	4.40	13.80	底部外面窓切り後ナデ	P40 実70
90	杯B	窯内第1面	18.20	4.60	12.50	底部外面窓切り後ナデ	P114 実73
91	杯B	窯内第1面	18.80	4.20	13.20	底部外面窓切り後ナデ ツメ跡残る	P83 実71
92	杯B	窯内第1面	17.50	4.60	12.20	底部外面窓削り ツメ跡残る	P2 実77
93	蓋	窯内第1面	14.10	4.10	—	頂部外面窓削り	P221 実60
94	直口蓋	窯内第1面	16.50	—	—		P169 実121
95	直口蓋	窯内第1面	12.50	—	—	体部外面叩き後カキメ 内面同心円文叩き	焚口 実124
96	蓋	窯内第1面	—	—	16.30	体部外面窓削り	直上平版?実142
97	杯A	窯内第2面	13.40	3.80	8.90		実137
98	杯A	窯内第2面	12.60	4.20	8.60		P3 実135
99	蓋	窯内第2面	17.10	4.20	—		P4 実139
100	杯B	窯内第2面	18.90	—	—		実138
101	杯A	窯内灰原直上	12.40	3.50	8.00	底部外面窓切り後ナデ	実96
102	杯A	窯内灰原直上	10.70	3.20	6.60	底部外面窓切り後ナデ	実47
103	杯A		11.30	3.75	7.10	底部外面窓切り後ナデ	実64
104	蓋A	窯内灰原上層	19.30	3.10	—	内面仕上げナデ	実85
105	蓋A	窯内灰原上層まで	18.90	3.00	—	内面仕上げナデ	P87・137 他実106
106	蓋A	窯内灰原上層まで	15.65	2.40	—	内面不定方向ナデ	焚口 実89

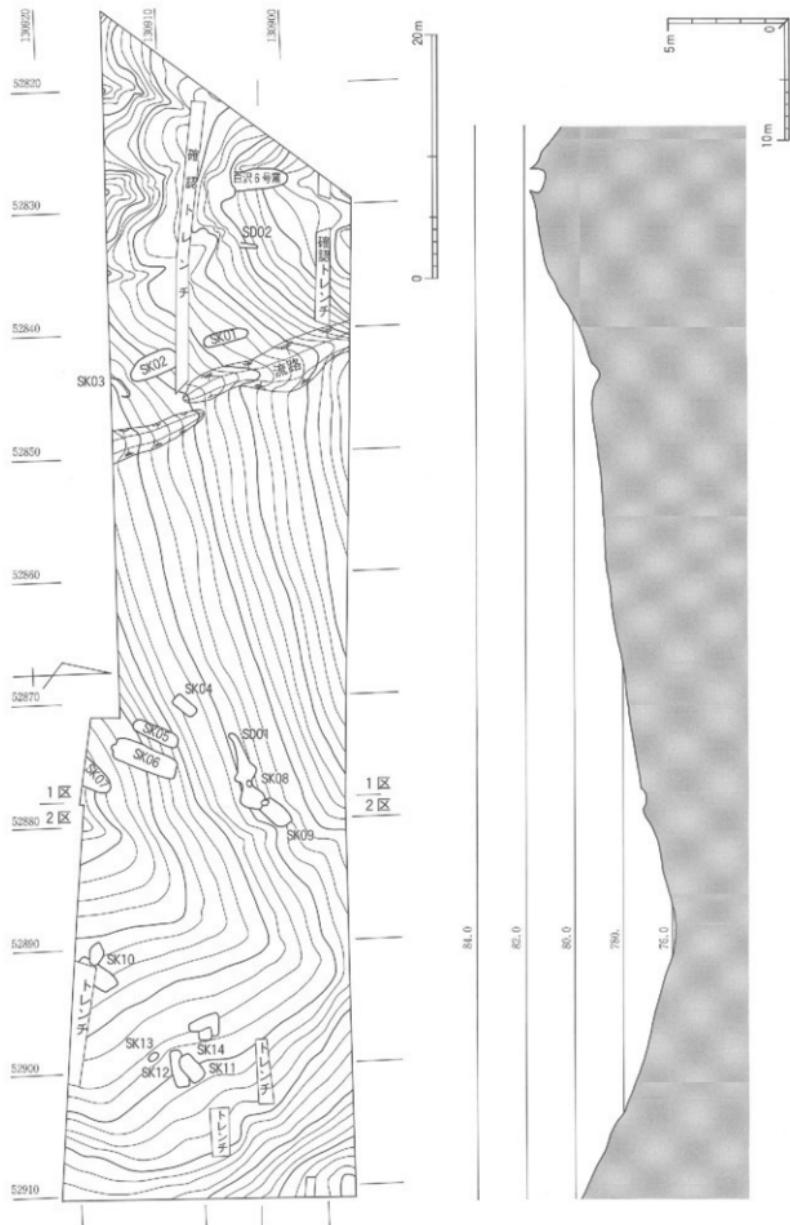
No	器形	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手 法 の 特 徴	備 考
107	蓋	窯内灰原	15.10	3.40	—		実97
109	蓋	窯内灰原直上まで	13.20	3.15	—	内面仕上げナデ	焚口P183 実90
108	蓋	窯内灰原直上	15.40	2.65	—	内面仕上げナデ	P98 実91
110	杯A	窯内埋土	11.60	3.80	8.80	底部外面範切り後ナデ	実67
111	杯A	窯内埋土	11.40	4.10	8.80	底部外面範切り後ナデ	実49
112	杯A	窯内埋土	12.20	3.35	7.80	底部外面範切り後ナデ 内面仕上げナデ	実171
113	杯A	窯内埋土	12.60	3.50	8.50	底部外面範切り後ナデ 内面仕上げナデ	実43
114	杯A	窯内埋土	11.50	3.80	7.70	底部外面範切り後ナデ	実44
115	杯A	窯内埋土	12.40	4.15	8.90	底部外面範切り後ナデ	実53
116	杯A	窯内埋土	11.90	4.50	8.05	底部外面範切り後ナデ	実50
117	蓋A	窯内埋土	13.80	2.50	—	内面仕上げナデ	実117
118	杯B	窯内埋土	18.30	4.15	12.70	底部外面範切り後ナデ	実76
119	杯B	窯内埋土	18.40	4.30	13.20	底部外面範削り 内面仕上げナデ	実74
120	杯B	窯内埋土	17.80	4.40	12.00		実72
121	杯B	窯内表土	16.70	4.60	12.75	底部外面範切り後ナデ 内面仕上げナデ	実181
122	杯B	窯内埋土上層	15.10	3.80	10.00	底部外面範削り 内面不定方向ナデ	実75
123	椀A	窯内埋土	13.20	5.00	9.80	底部外面範切り後ナデ 内面不定方向ナデ	実174
124	壺	窯内埋土上層	—	—	8.40	体部外面範削り 底部外面範切り後ナデ	実140
125	杯A	灰原D区上層	18.00	5.35	15.00	底部外面範削り 内面不定方向ナデ 竹管文	実154
126	杯A	灰原B区1層	18.15	3.20	11.80	底部外面範切り後ナデ	実145
127	杯A	灰原B区1層	16.15	3.75	13.50	底部外面範切り後ナデ 内面仕上げナデ	中央谷東半 実155
128	杯A	灰原D区上層	13.60	4.30	10.60	底部外面範切り後ナデ 内面仕上げナデ	実156
129	杯A	灰原C区5層	12.70	3.50	8.50	底部外面範切り後ナデ	実148
130	杯A	灰原D区上層	11.65	3.60	8.90	底部外面範切り後ナデ	実161
131	杯A	灰原D区	11.85	3.20	8.20	底部外面範切り後ナデ	実158
132	杯A	灰原	10.20	3.25	6.90	底部外面範切り	実177
133	杯A	灰原D区上層	13.00	3.60	8.35	底部外面範切り後ナデ	実165
134	杯A	灰原C区5層	12.10	3.50	7.85	底部外面範切り	実149
135	杯A	灰原D区3層	11.70	3.70	7.30	底部外面範切り	実163
136	杯A	灰原D区上層	11.45	3.70	7.90	底部外面範切り後ナデ	実162
137	杯A	灰原D区上層	11.75	3.60	6.70	底部外面範切り	実164
138	杯A	灰原上層	11.10	3.30	8.60	底部外面範切り	実169
139	杯A	灰原C・D区3層	10.60	3.80	7.40	底部外面範切り後ナデ	実150
140	杯A	灰原B区2層	12.35	3.75	7.50	底部外面範切り後ナデ	実159
141	杯A	灰原C区5層	11.60	3.30	7.00	底部外面範切り後ナデ	実151
142	杯A	灰原C区3層	11.50	3.20	7.75	底部外面範切り 内面不定方向ナデ	実147

No	器形	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手 法 の 特 徴	備 考
143	杯A	灰原2層	11.50	2.85	8.30	底部外面範切り後ナデ	実168
144	杯A	灰原C・D区3層	11.85	3.30	8.45	底部外面範切り	実160
145	杯A	灰原C区4層	11.60	4.25	8.10	底部外面範切り	実152
146	杯A	灰原D区5層	11.60	4.10	6.90	底部外面範切り 内面仕上げナデ	実167
147	杯A	灰原D区上層	12.10	4.30	7.50	底部外面範切り後ナデ 内面仕上げナデ	実166
148	杯A	灰原上層	11.65	3.95	7.60	底部外面範切り後ナデ	実172
149	杯B	灰原D区	14.10	4.80	9.80	底部外面範削り 内面仕上げナデ	実180
150	杯B	灰原B区	14.55	4.55	10.05	底部外面範削り 内面仕上げナデ	窓内3区 実178
151	杯B	灰原A区	11.20	4.95	7.20	底部外面範削り 内面仕上げナデ	窓内3区 実179
152	蓋	灰原D区4層	19.70		—		実231
153	蓋	灰原C区4層	18.40		—		実201
154	蓋	灰原C・D区4層	16.10		—		実200
155	蓋	灰原C・D区3層	15.30	2.95	—	天井部範削り 内面仕上げナデ	実202
156	蓋	灰原D区上層	20.80	3.40	—	天井部範削り 内面仕上げナデ	窓2面P4 実198
157	蓋	灰原B・C区5層	20.90	1.80	—	内面仕上げナデ	1層 実199
158	蓋	灰原D区上層	18.35	3.35	—	内面仕上げナデ	実208
159	蓋	灰原D区	18.40	2.40	—	内面仕上げナデ	実210
160	蓋	灰原C・D区3層	17.50	3.90	—		実197
161	蓋	灰原E区最下層	17.00	1.50	—	内面仕上げナデ	実214
162	蓋	灰原D区5層	16.00	2.70	—	内面仕上げナデ	実213
163	蓋	灰原	16.55	3.00	—	内面仕上げナデ	実186
164	蓋	灰原B・C区	16.60		—	内面仕上げナデ	実196
165	蓋	灰原B区2層	16.50	1.50	—	内面仕上げナデ	実206
166	蓋	灰原C区3層	16.15	2.20	—	内面仕上げナデ	実103
167	蓋	灰原C区3層	15.50	2.00	—	内面仕上げナデ	実212
168	蓋	灰原D区3層	13.65	1.70	—	内面仕上げナデ	実195
169	蓋	灰原C・D区3層	13.50	2.45	—	内面仕上げナデ	実192
170	蓋	灰原2層	18.40	2.35	—	内面仕上げナデ	実187
171	蓋	灰原	17.30	3.00	—	内面仕上げナデ	実182
172	蓋	灰原	16.70	3.15	—		実183
173	蓋	灰原	16.50	2.75	—	内面仕上げナデ	実185
174	蓋	灰原B・D区2層	15.70	2.80	—	内面仕上げナデ	実205
175	蓋	灰原C区3層	15.60	2.55	—	内面仕上げナデ	実209
176	蓋	灰原D E区	15.90	1.85	—	内面仕上げナデ	実207
177	蓋	灰原D区上層	15.70	2.50	—	内面仕上げナデ	実204
178	蓋	灰原D区3層	15.30	2.00	—	内面不定方向ナデ	実193

No	器形	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手 法 の 特 徴	備 考
179	蓋	灰原表土	14.95	3.40	—	内面不定方向ナデ	実184
180	蓋	灰原D区上層	15.10	3.25	—	内面仕上げナデ	実194
181	蓋	灰原上層	16.00		—		実250
182	蓋	灰原D区上層	15.80		—	内面仕上げナデ	実211
183	蓋	灰原2層	14.60	3.40	—	天井部範切り後ナデ ツマミ着かない	実188
184	高杯	灰原D区	11.20				実239
185	高杯	灰原E区2層	12.65				実238
186	脚部	灰原D区3層			8.75		実232
187	椀	灰原B区2層	11.80	5.50	7.60		灰CD区3層実179
188	鉢	灰原E区上層	12.70	3.90	—		実230
189	鉢	灰原2層	25.80				実216
190	壺	灰原D区上層	13.00				窯埋土 実200
191	壺	灰原D区上層	8.20				実229
192	長頸壺	灰原C区4・5層	9.20				実141
193	長頸壺	灰原C区5層	13.00				実228
194	長頸壺	灰原C区3層	13.30			頸部に波状文	実225
195	長頸壺	灰原C区3・5層	14.70				実227
196	直口壺	灰原	9.50				実218
197	直口壺	灰原C区5層	11.60				実217
198	直口壺	灰原C区4・5層	10.50	19.90		底部外面静止範削り	窯内灰原上 実143
199	壺	灰原C区4・5層				体部全体範削り 最大腹径17.6	実245
200	壺	灰原3・1・5層				体部範削り 最大腹径18.00	実220
201	壺	灰原C区3層				体部下半範削り 最大腹径18.60 高台付き	実221
202	壺	灰原C区3層				高台付き	実219
203	壺	灰原C区3層				体部範削り 最大腹径27.80 高台付き	実246
204	壺	灰原C区4層		9.50		体部下半範削り 底部ナデ 最大腹径15.70	窯内埋土 実243
205	壺	灰原C・D区3層				底部周囲外面に格子目叩き 高台付き	窯内P102 実192
206	高台	灰原C区3層			10.80		実235
207	高台	灰原C区5層			9.65		実233
208	高台	灰原C区5層			8.90		実234
209	瓶	灰原C区3層			11.40	底部周囲範削り	窯内埋土 実244
210	平瓶	灰原D区5層				側面範削り	実226
211	横瓶	灰原C区4・5層	11.60	28.30	—	内面車輪文叩き	窯内P91 実247
212	壺	灰原C区4・5層	28.00		—	内面車輪文叩き	窯埋土SK01 実144
218	蓋 a	S K09				内面仕上げナデ	実254
219	蓋	S K09	18.50		—	内面仕上げナデ	実253

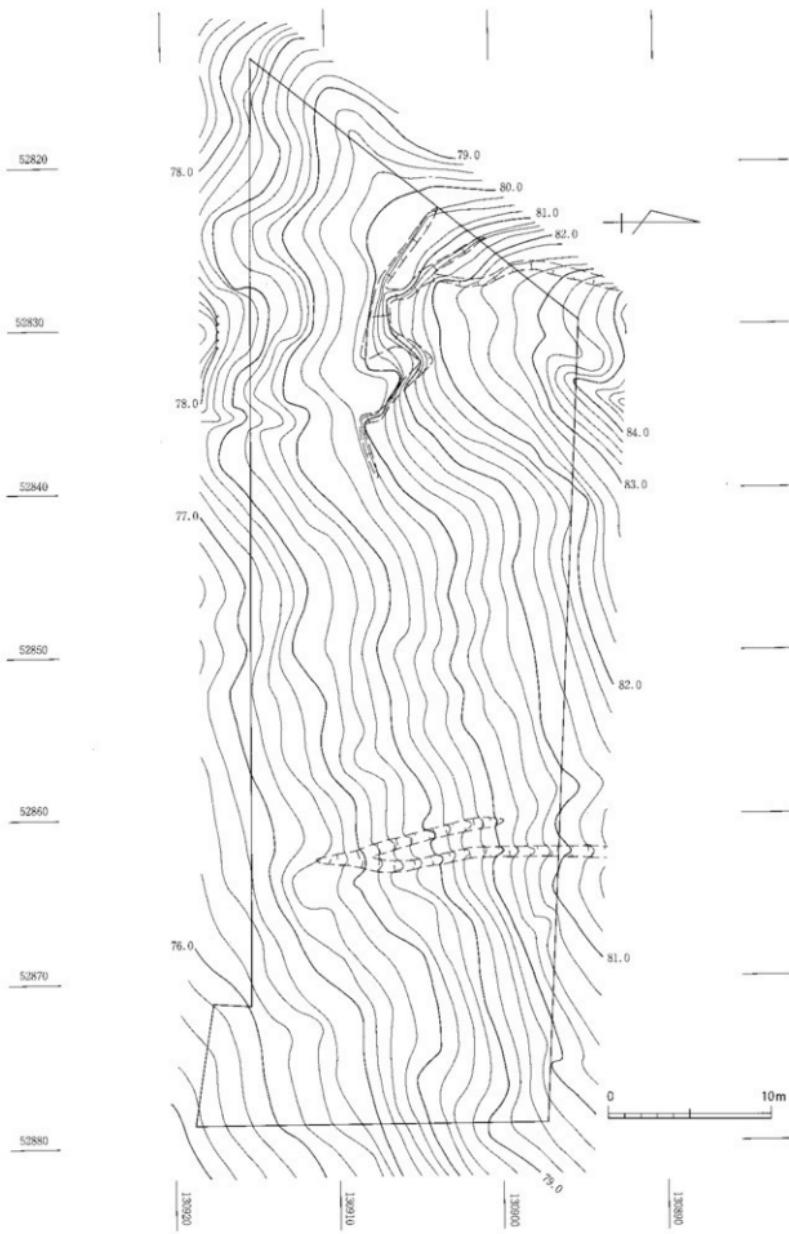
No	器形	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法の特徴	備考
230	杯B	S K09	17.60			口縁部下半範削り	実249
231	蓋c	S K08					実251
232	杯B	S K08			12.80		実252
233	杯B	S K02			11.40		実248
234	杯A	S D01			8.60		実255
235	杯B	S D01			11.70		実256
236	杯A	窯東側流路	11.30	3.50	6.60		窯理工 実200
237	壺蓋	窯東側流路	19.70	5.15		内面仕上げナデ	実236
238	長頸壺	窯東側流路	10.10				実242
239	平瓶	窯東側流路				最大腹径12.30	実223
240	碗B	黄褐色粗砂	16.40	4.70	5.50	底部糸切り	実215
241	杯A	窯上表土	11.70				実170
242	杯A	窯上表土	9.00	2.60	5.95	底部範切り	実176
243	直口壺	灰原表土	28.20				実123
244	甕	灰原表土	28.20			内面車輪文叩き後ナデ	窯東斜面 実133
245	鉢	灰原表土	35.5			内面範削り	実240

図版

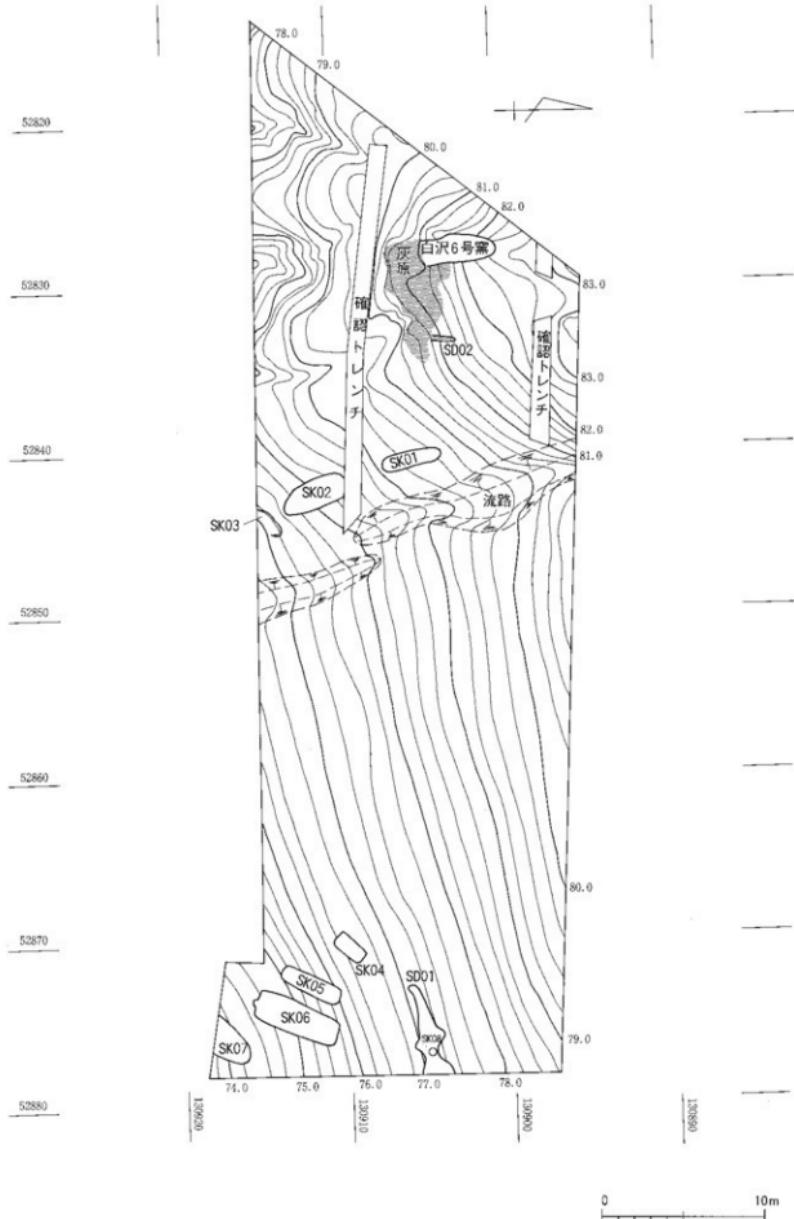


調査区 全図

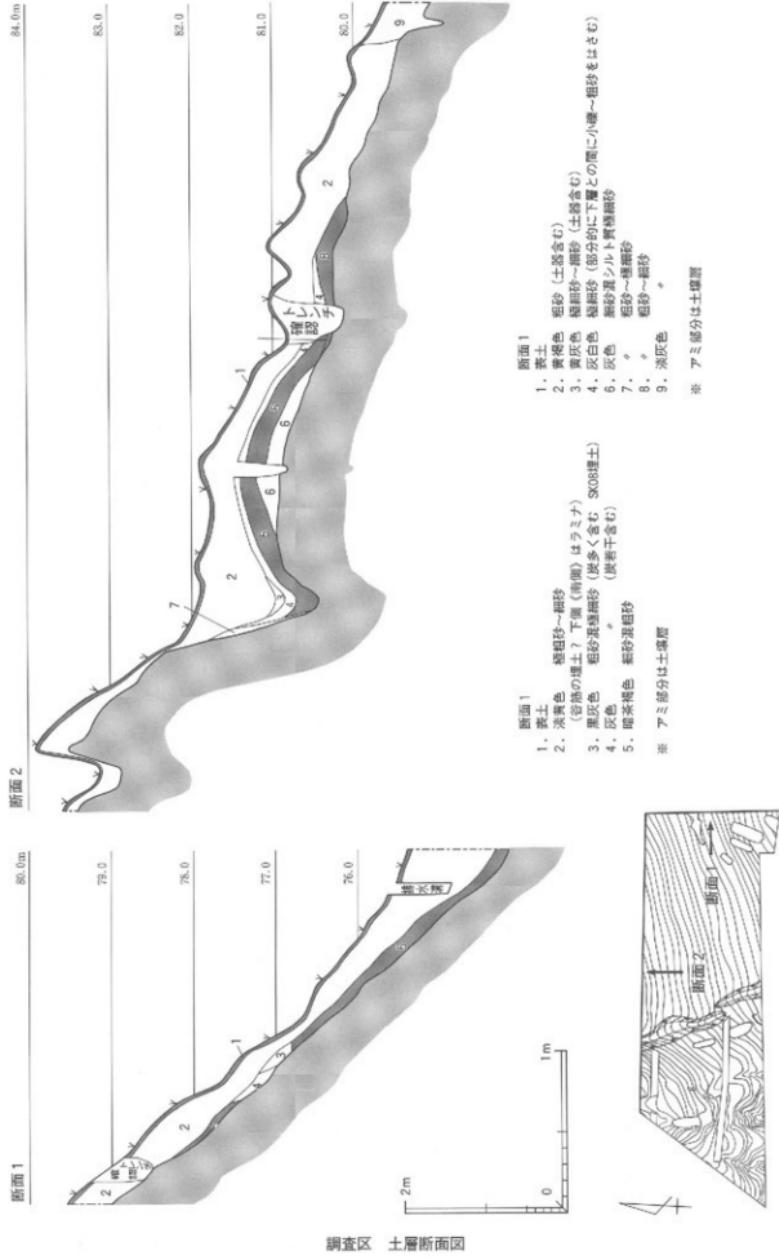
図版2

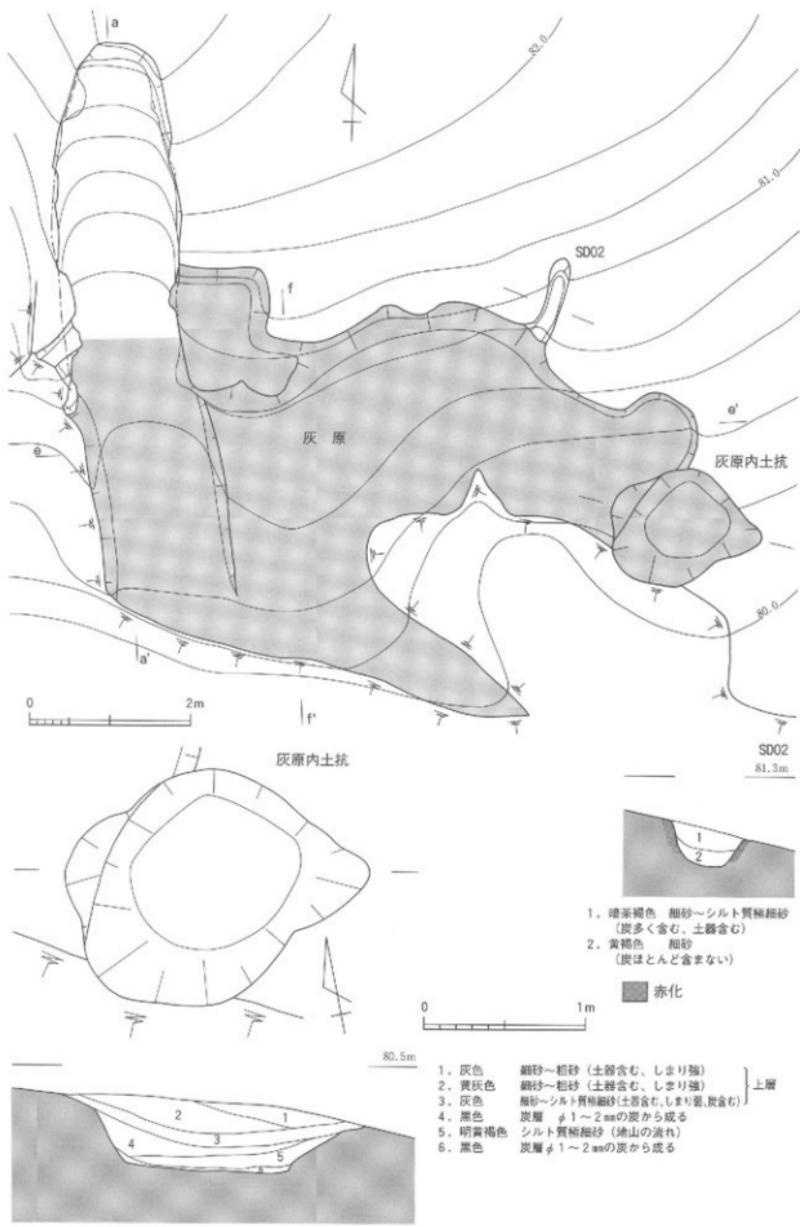


1区 地形図（調査前）



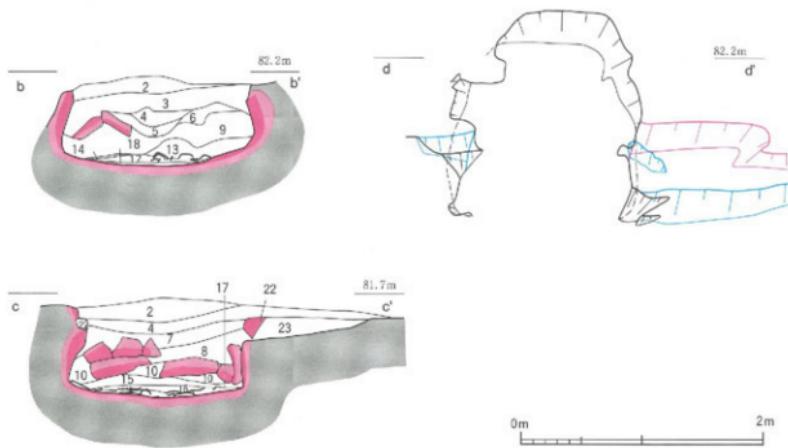
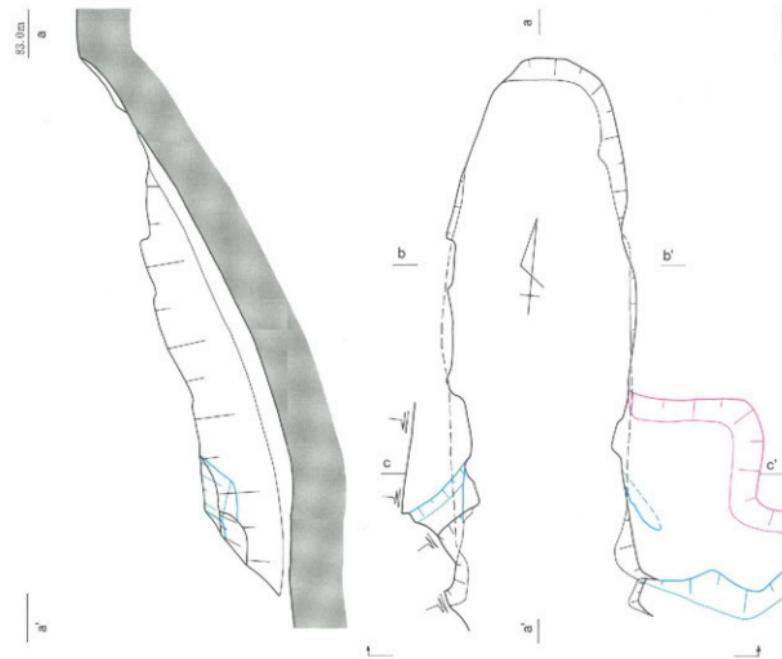
1区 地形図（調査後）



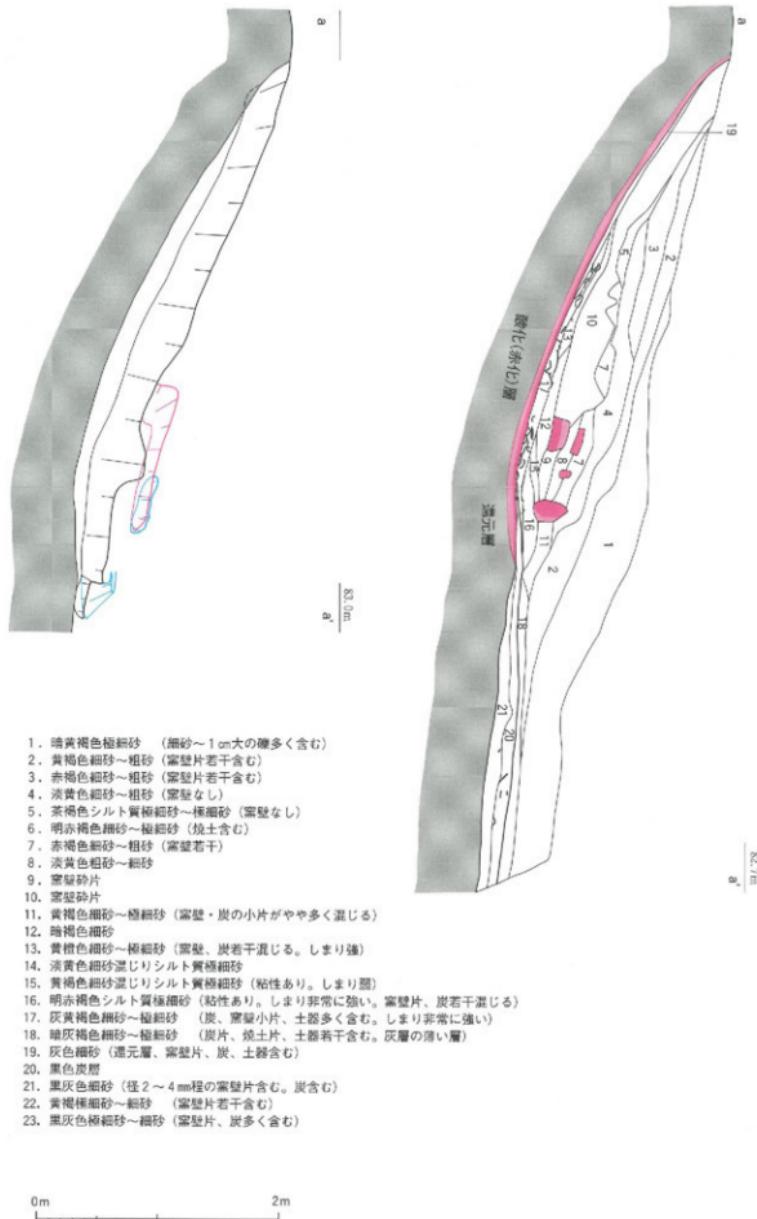


窓周辺平面図（完掘状況 最終面）

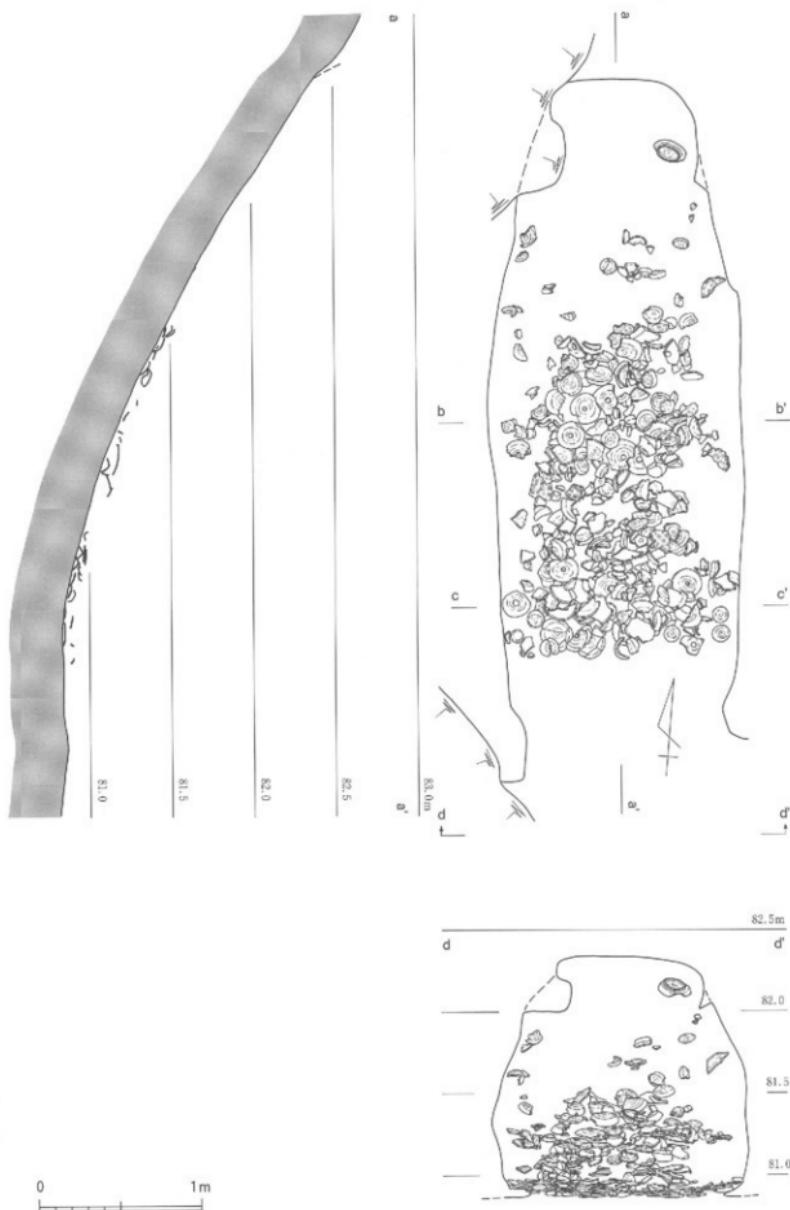
図版6



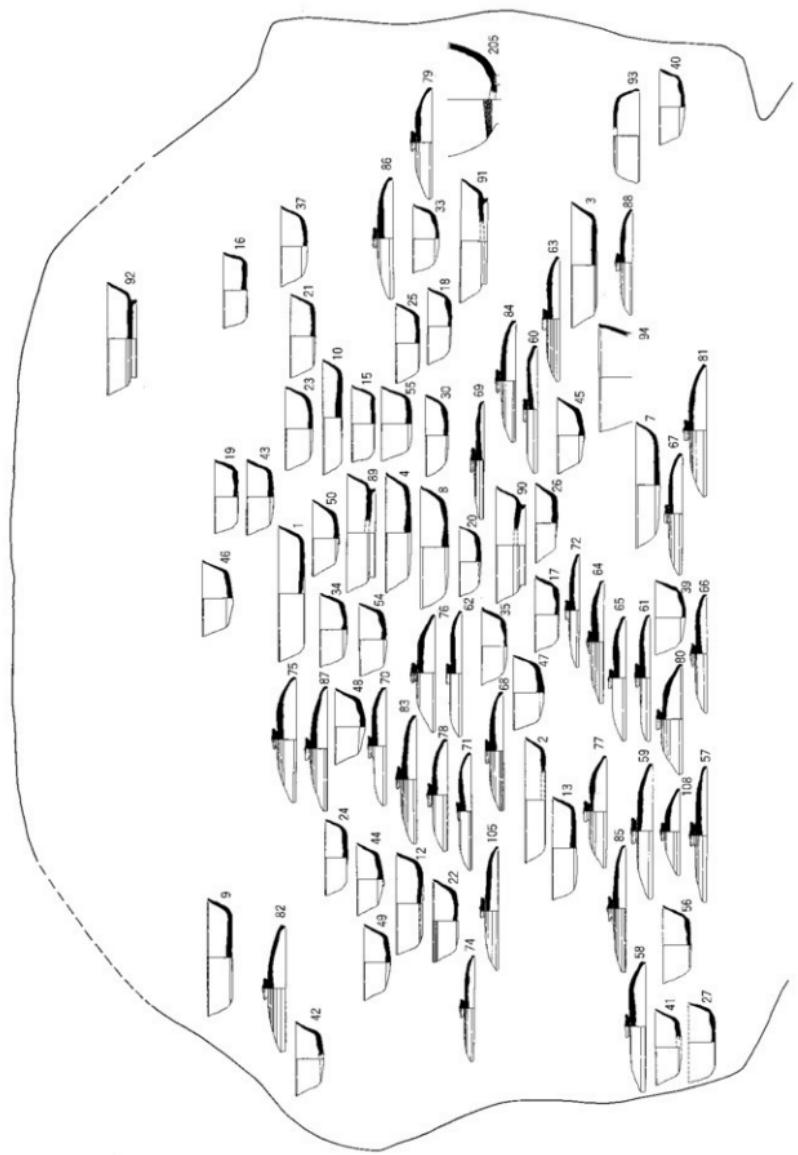
6号窓 実測図(1)



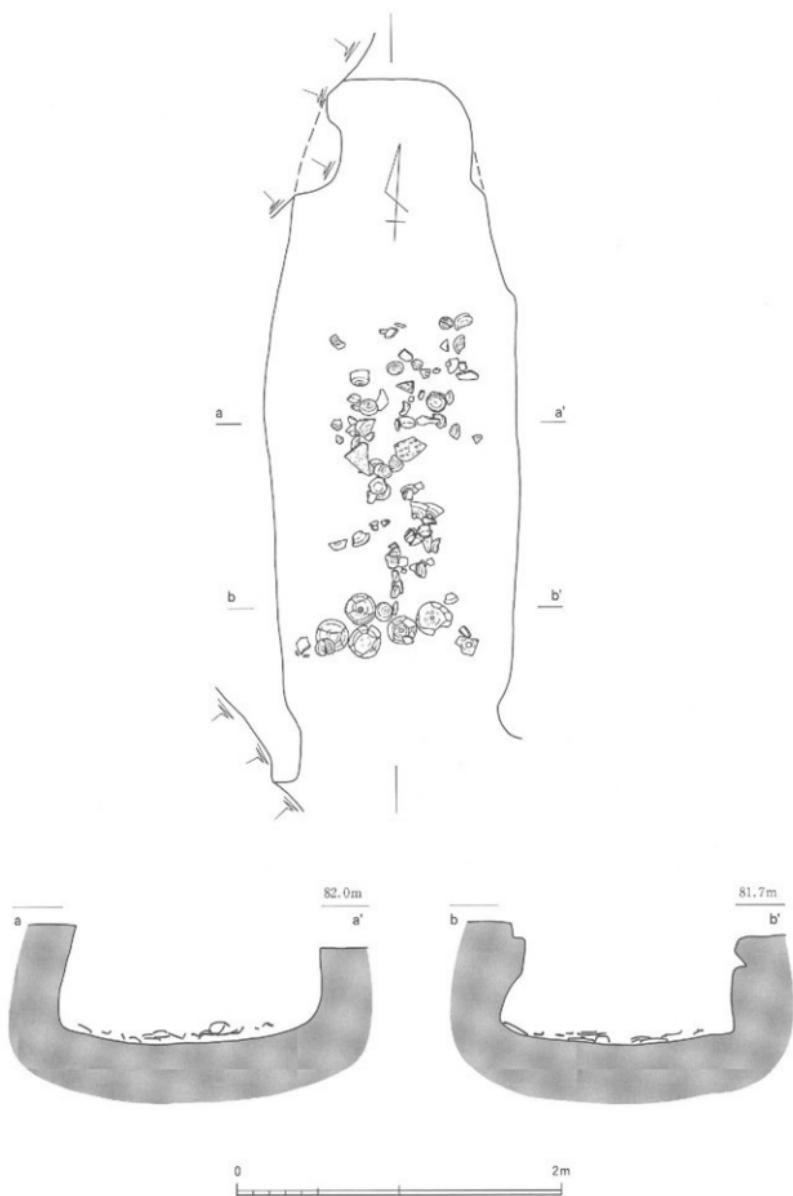
窓実測図 (2)



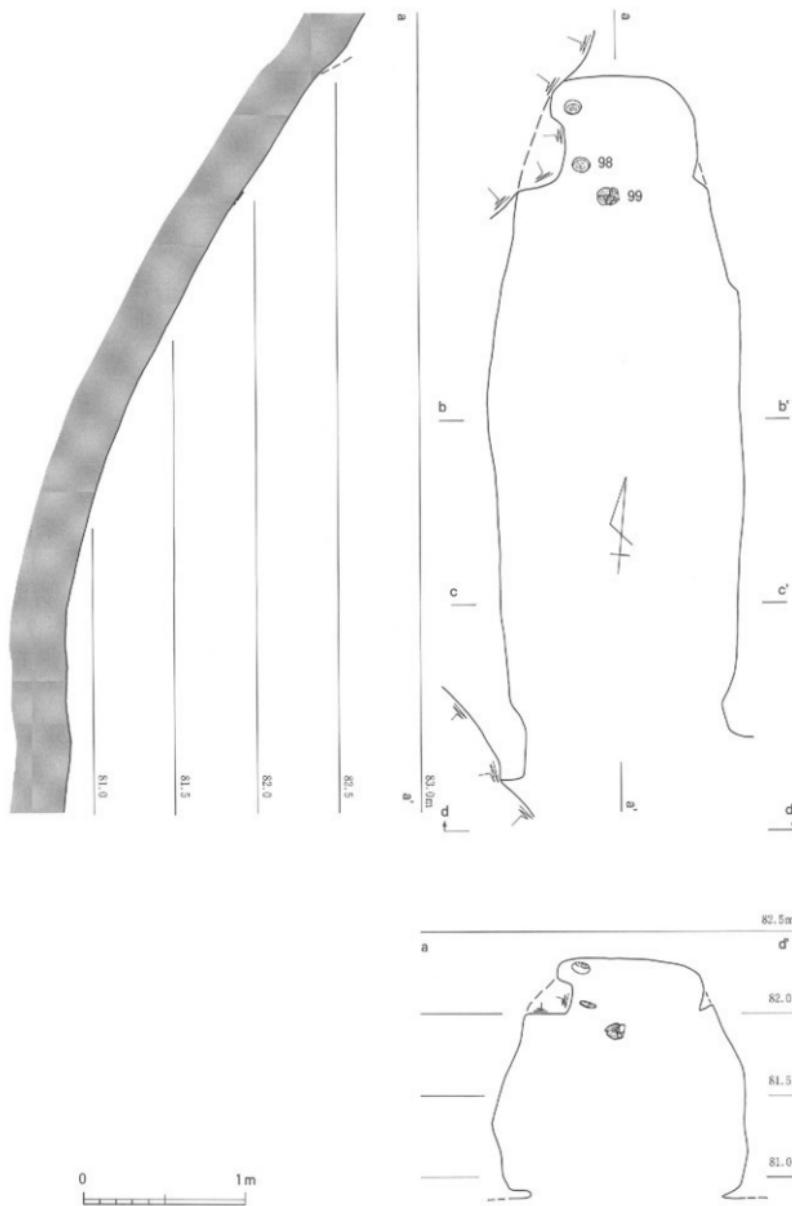
遺物出土状況（第1面上層）



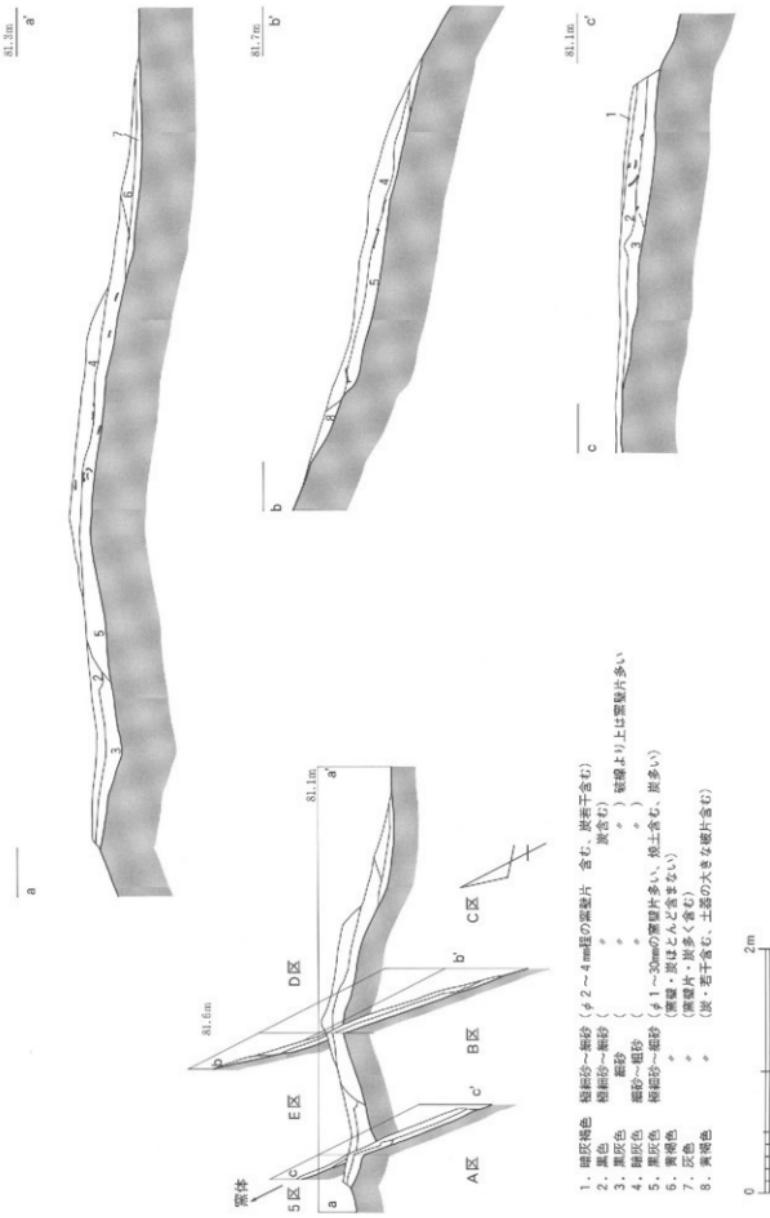
出土状況模式図（第1面）



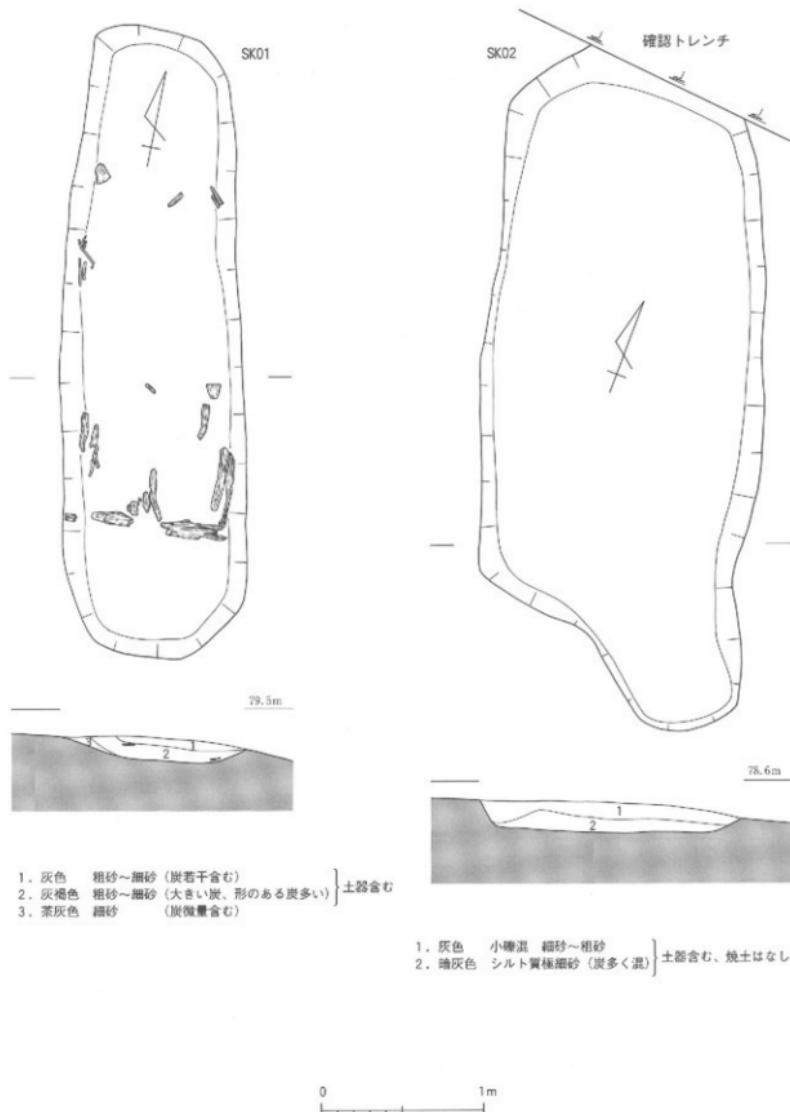
遺物出土状況（第1面下層）



遺物出土状況（第2面）

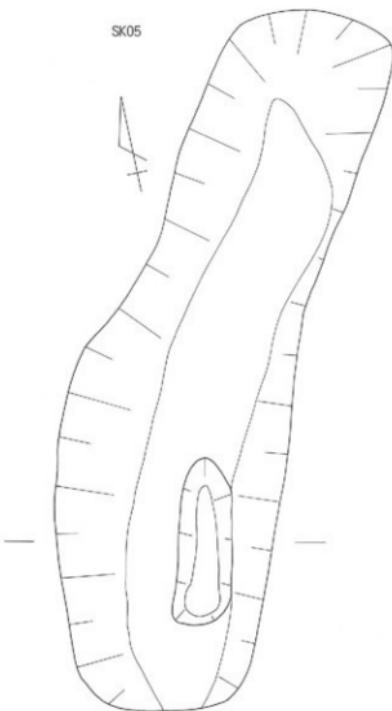
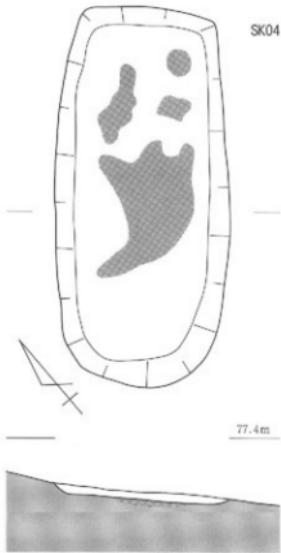


灰原土層断面図

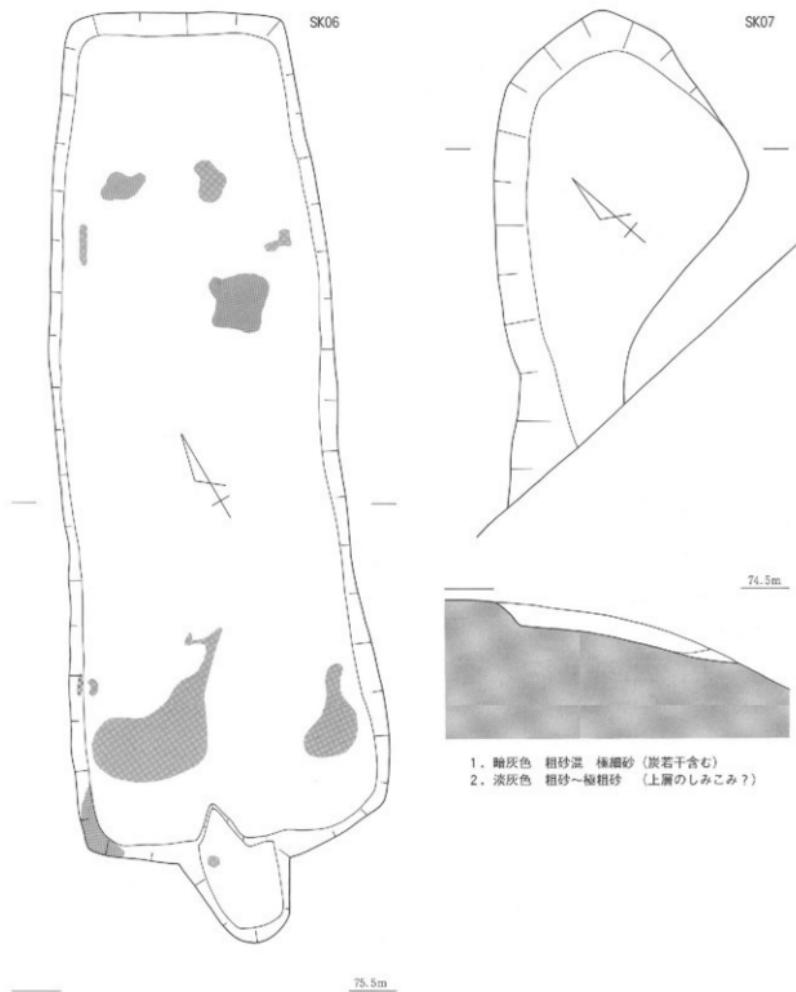


1区 SK01・02

図版14



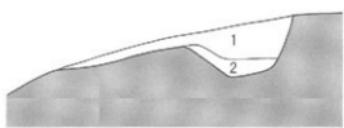
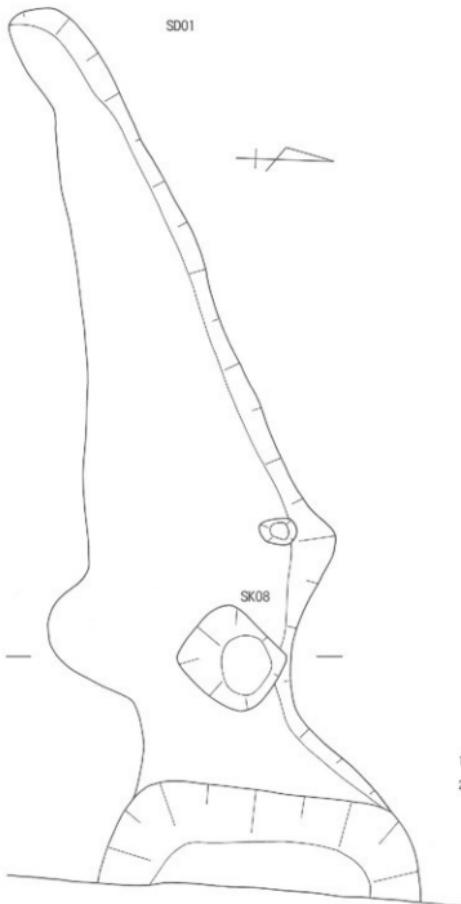
1区 SK04・05



■ 赤化

1区 SK06・07

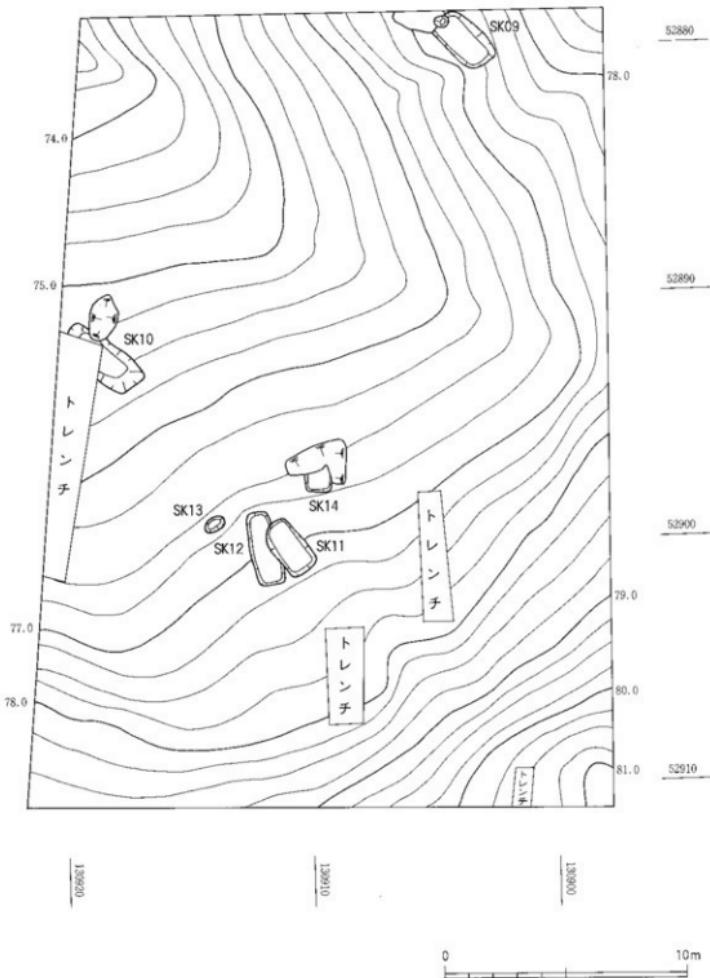
0 1m



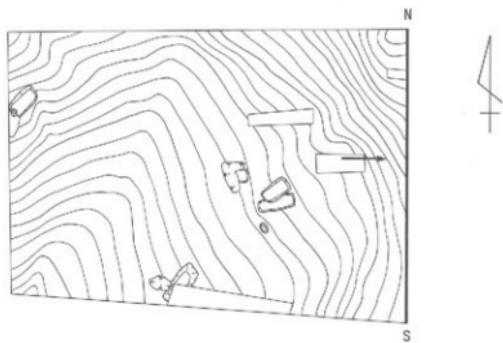
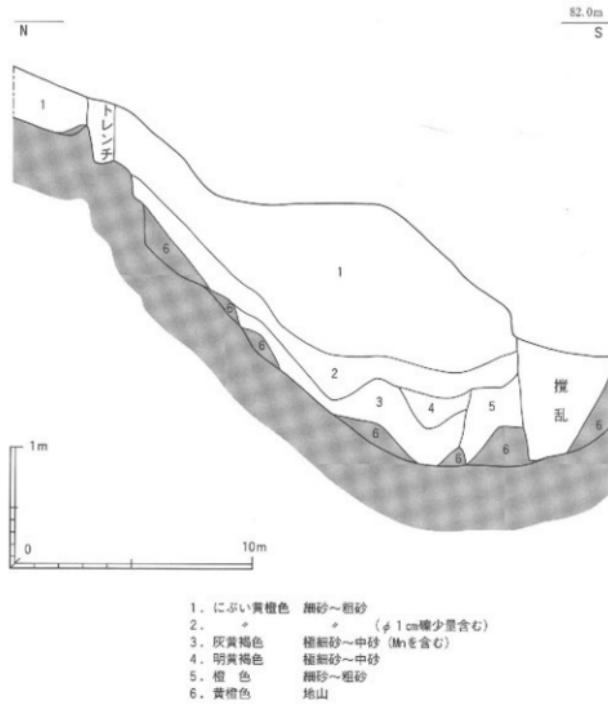
1. 黒褐色 粗砂～細砂
2. 黒色 粘 (炭だけ)

0 1m

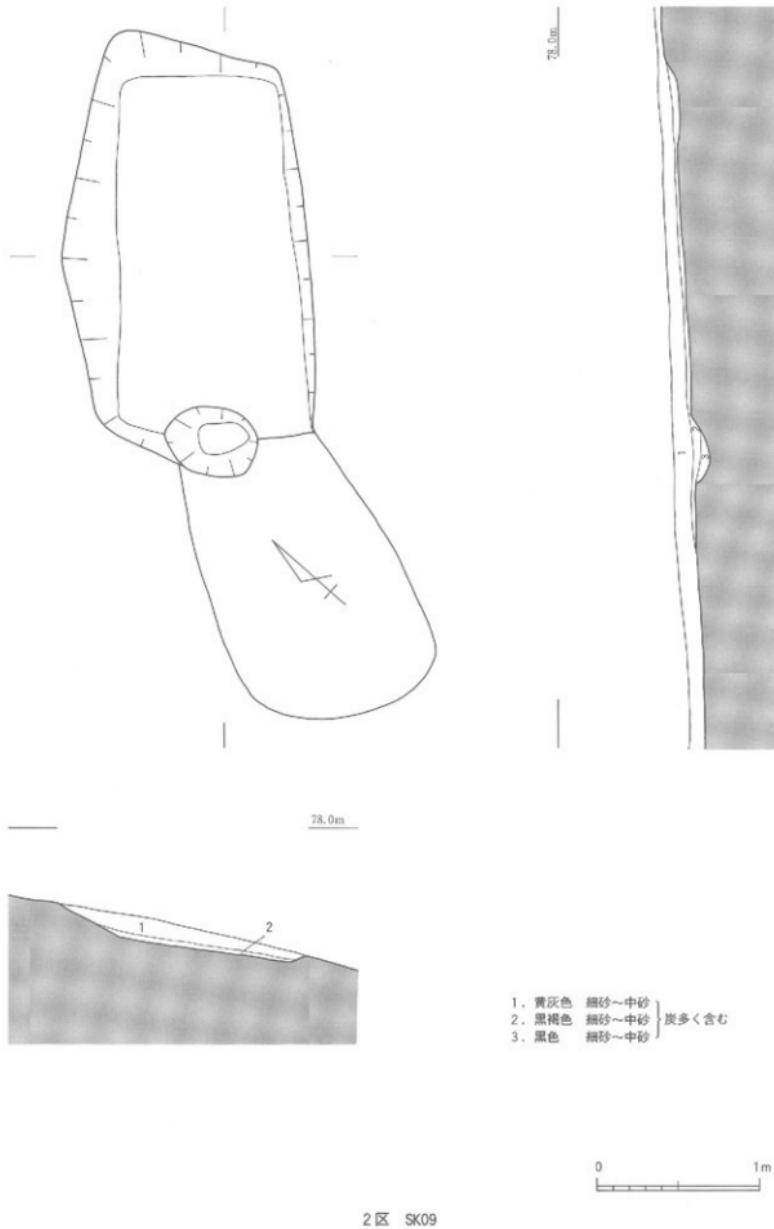
1区 SK08・SD01

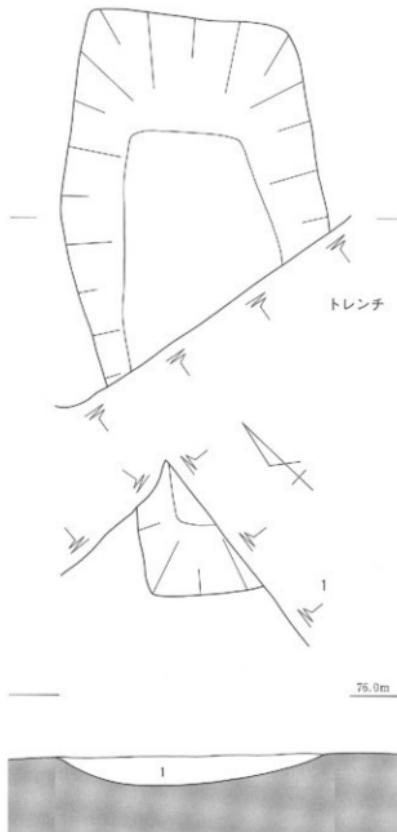


2区地形図（調査後）



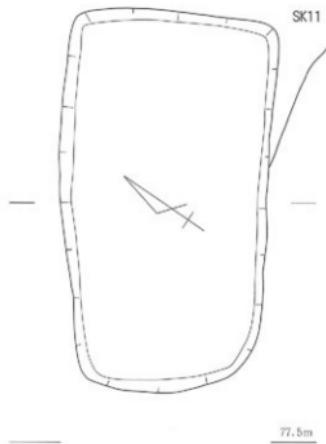
2区 土層断面図



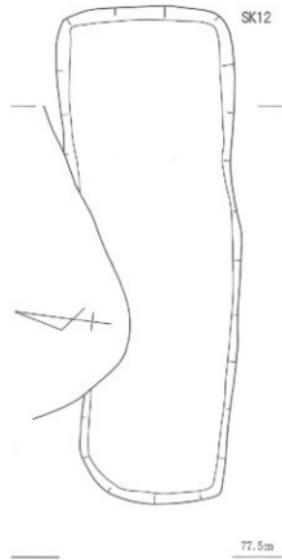


1. 黒褐色 細砂～中砂（炭含む）

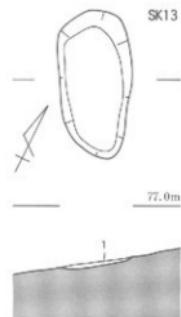




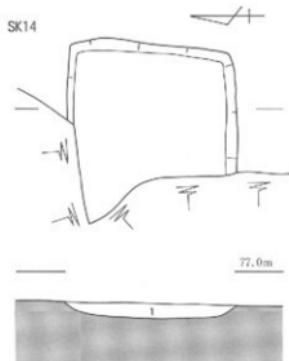
1. 黒褐色 細砂～中砂（炭含む）



1. 黄褐色 細砂～中砂（炭含む）



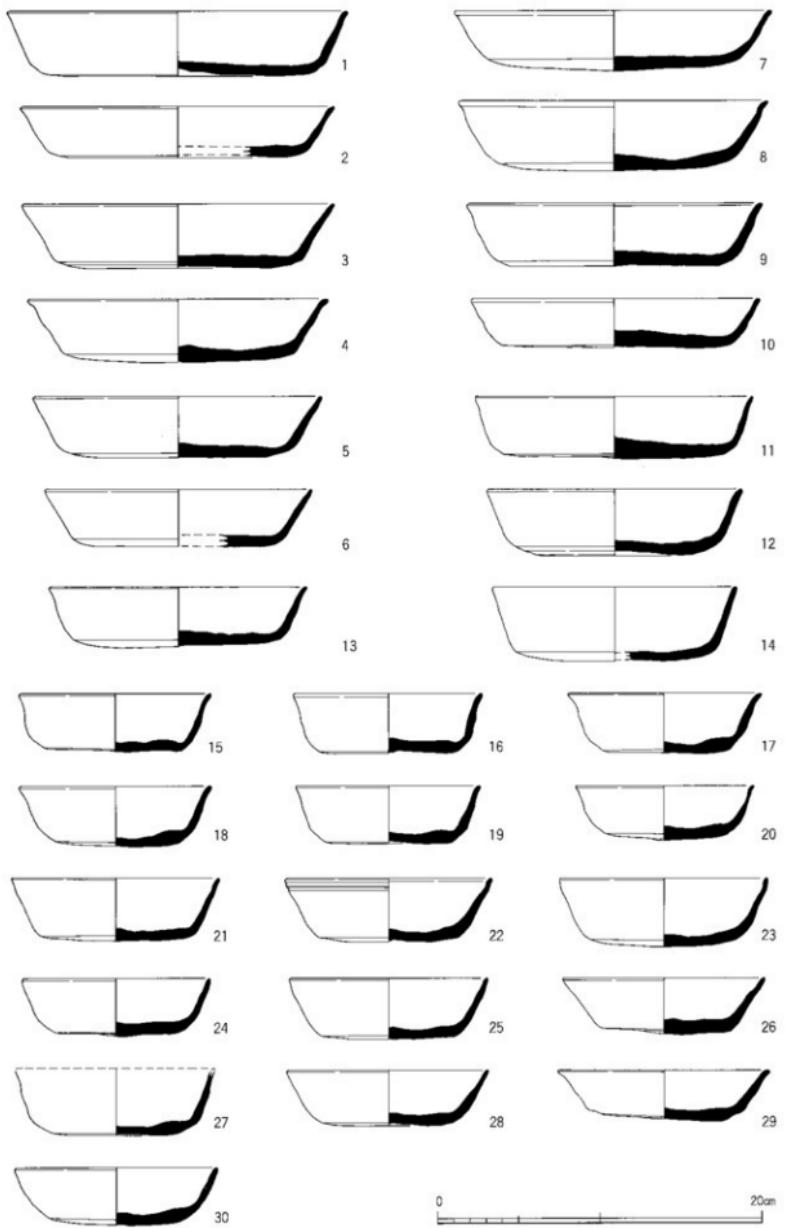
1. 黒褐色 細砂～中砂（炭含む）



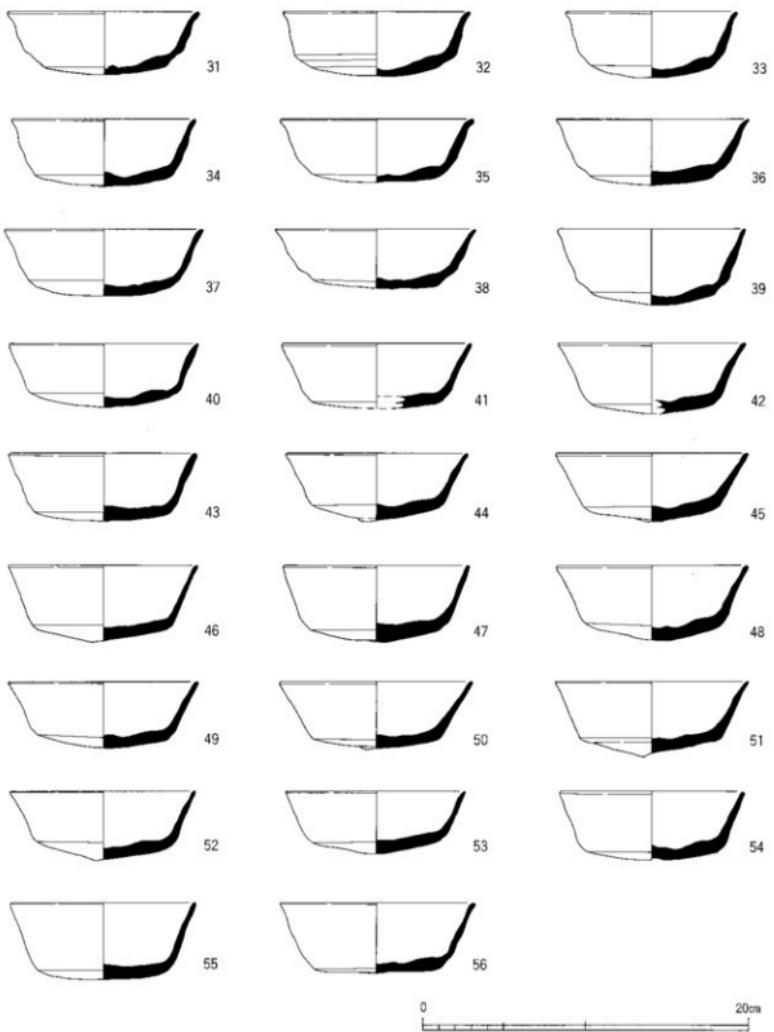
1. 黒褐色 細砂～中砂（炭含む）



図版22

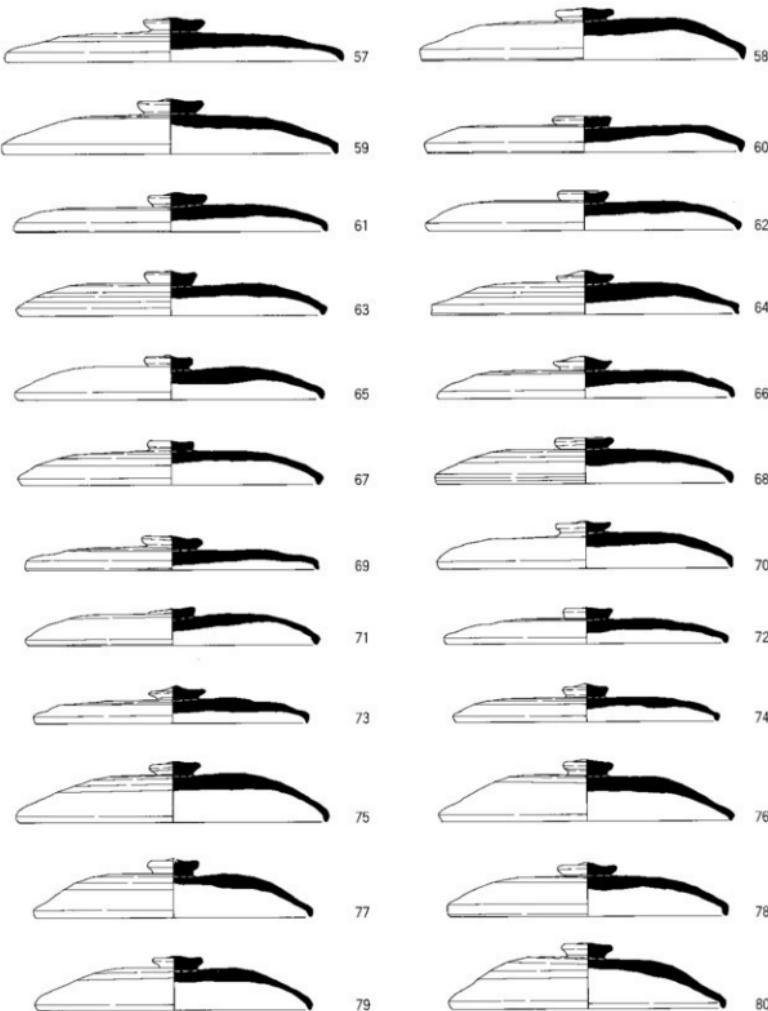


出土遺物 (1)

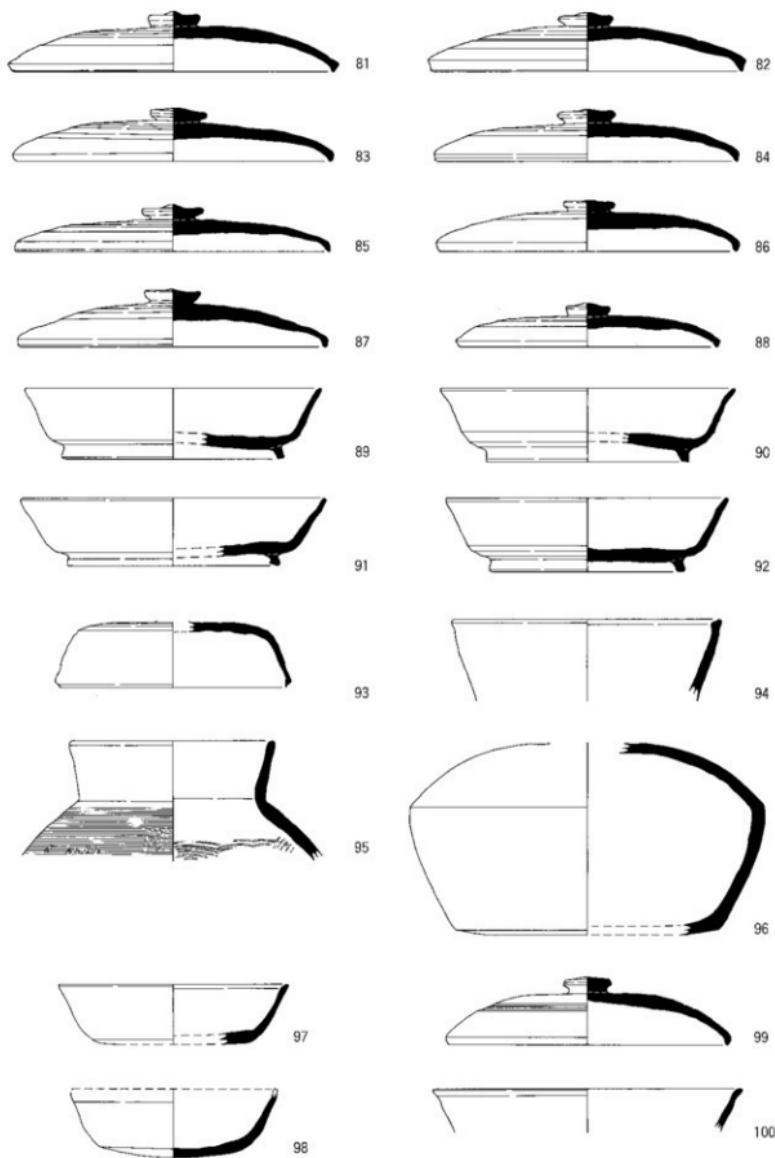


出土遺物 (2)

図版24

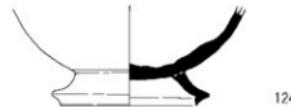
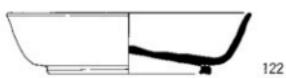
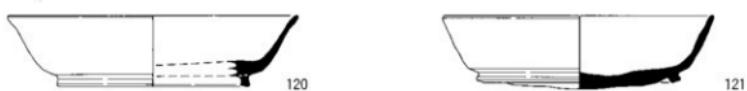
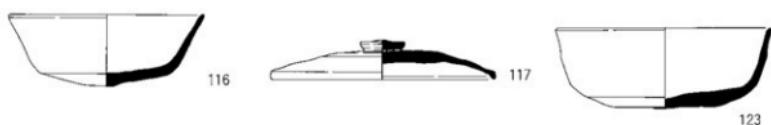
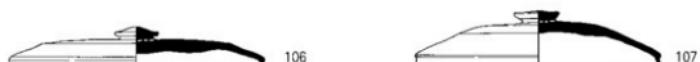


出土遺物 (3)

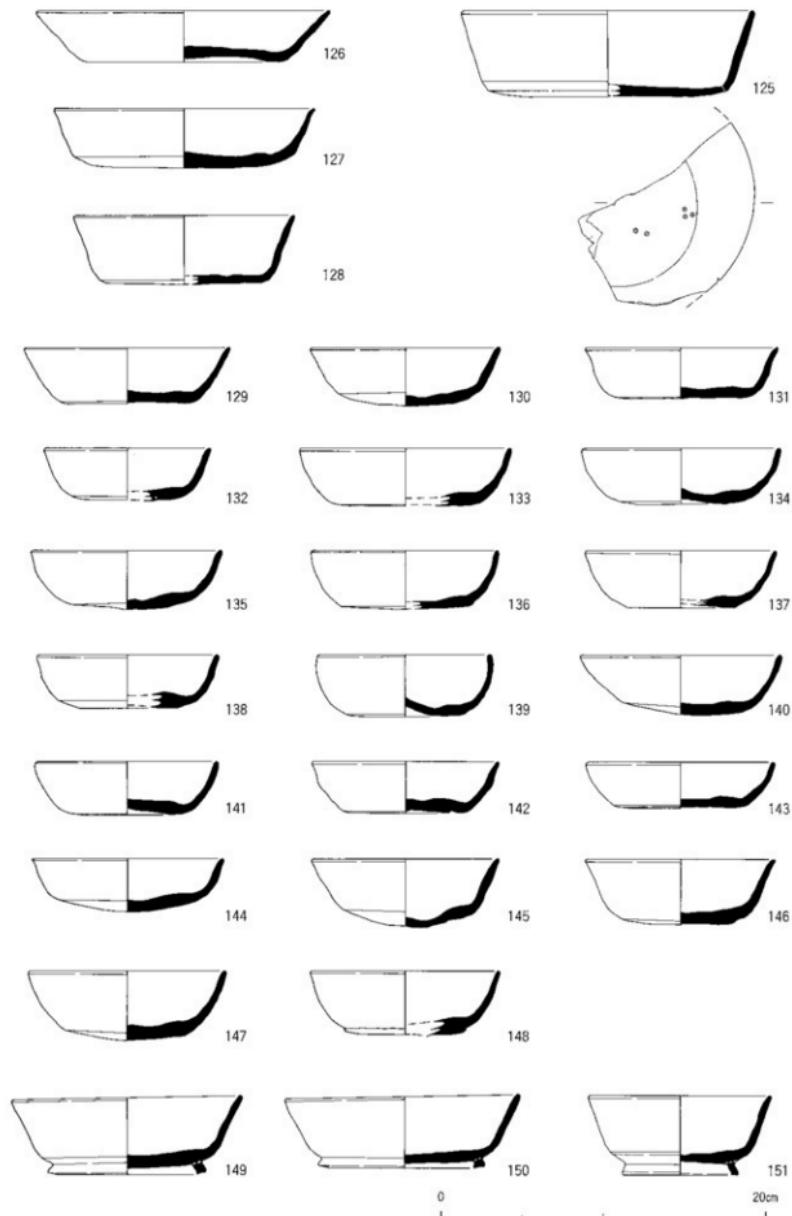


0 20cm

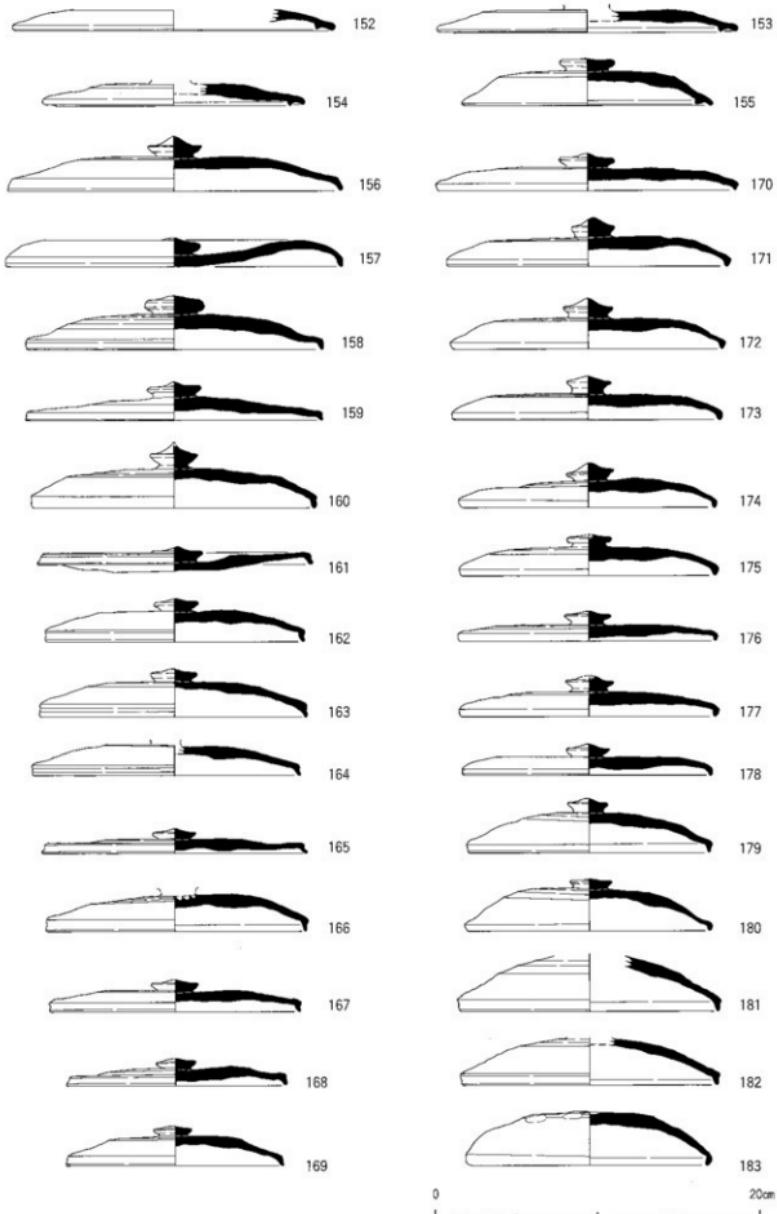
出土遗物 (4)



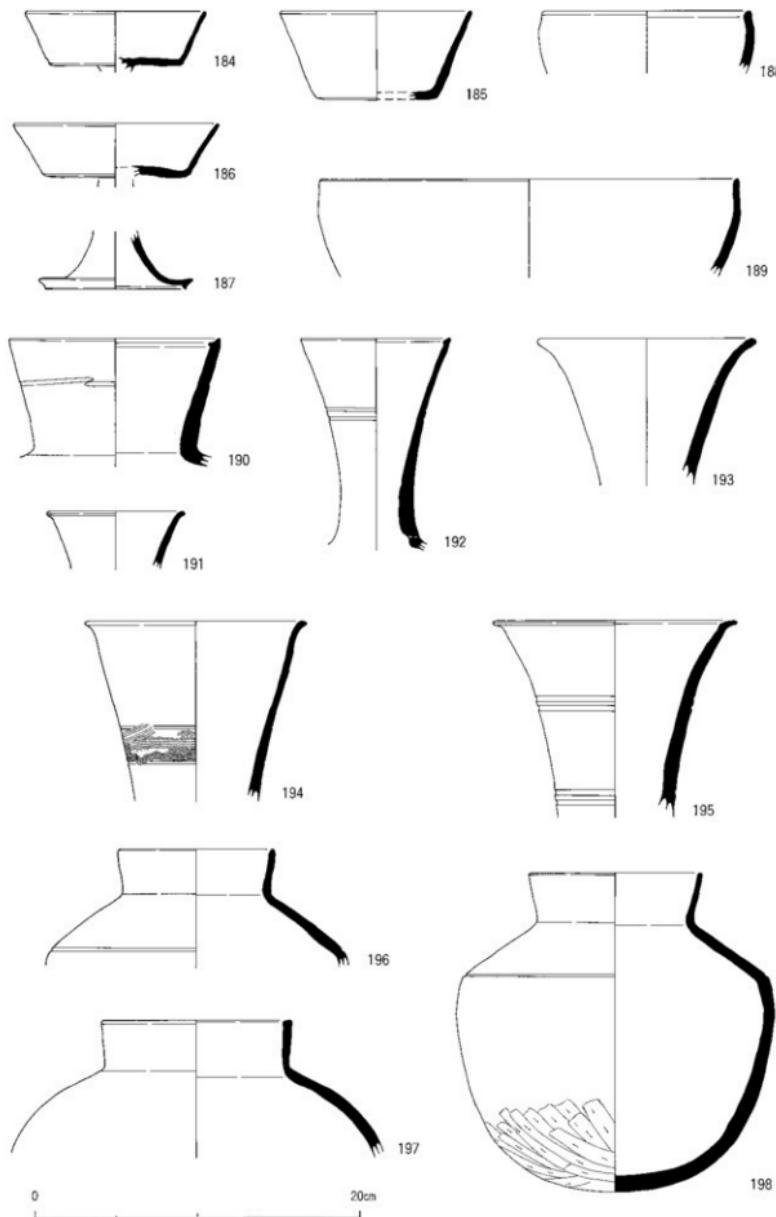
出土遺物 (5)



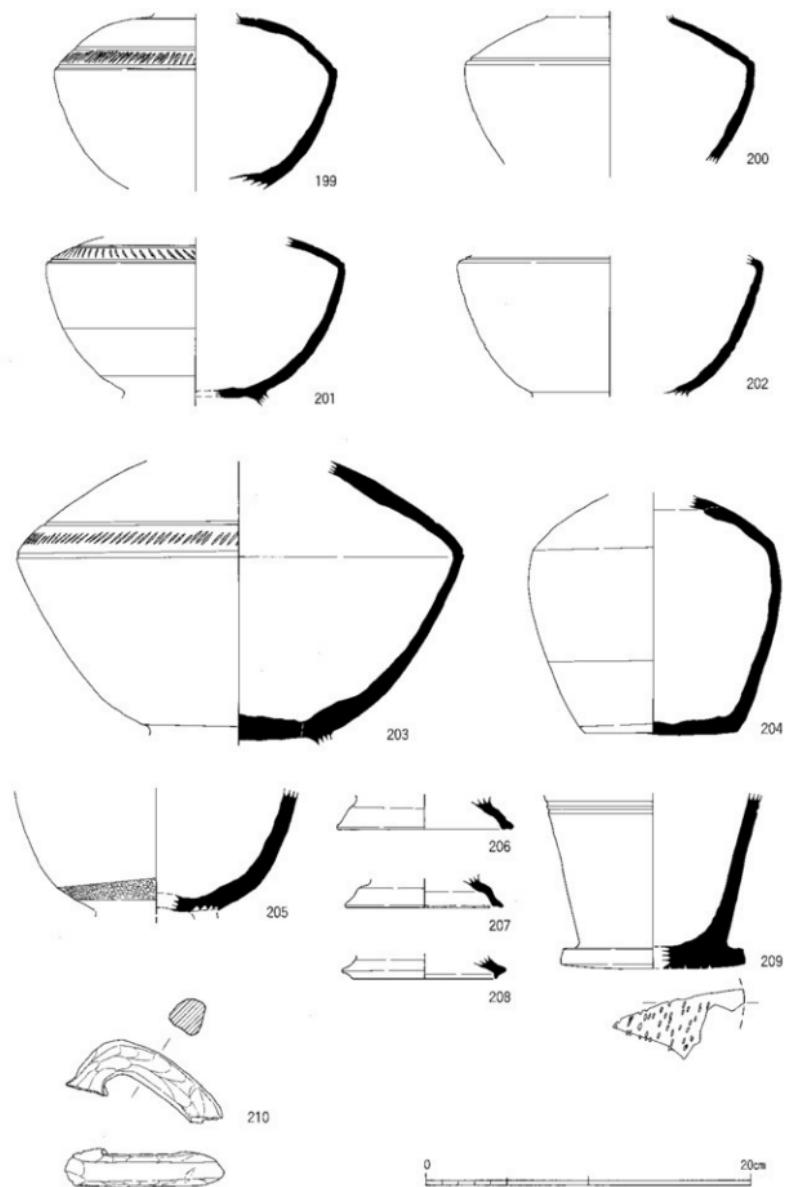
出土遺物 (6)



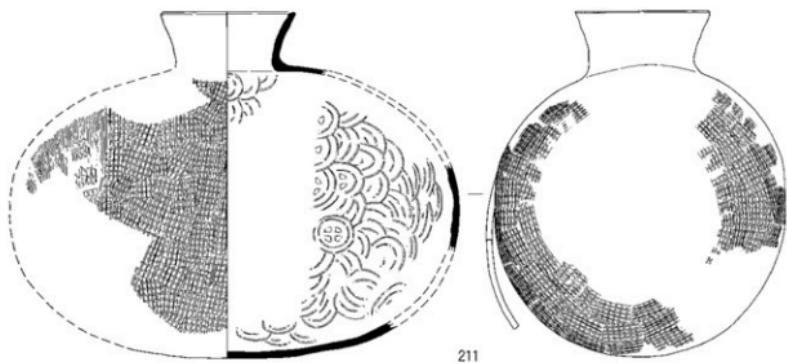
出土遺物 (7)



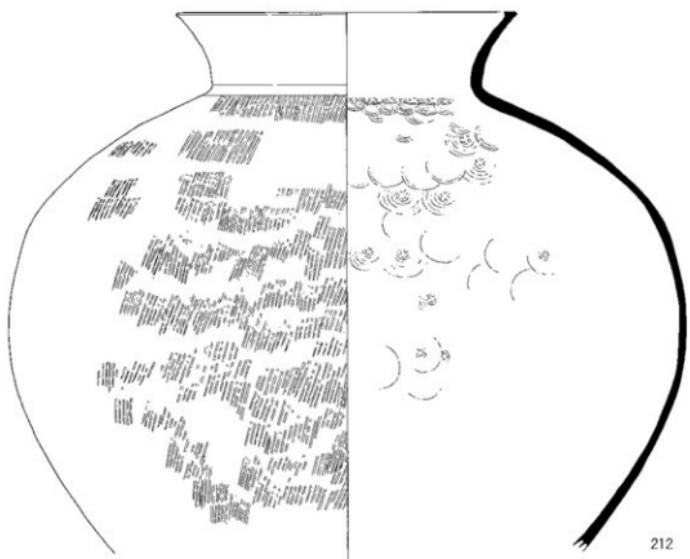
出土遺物 (8)



出土遺物 (9)



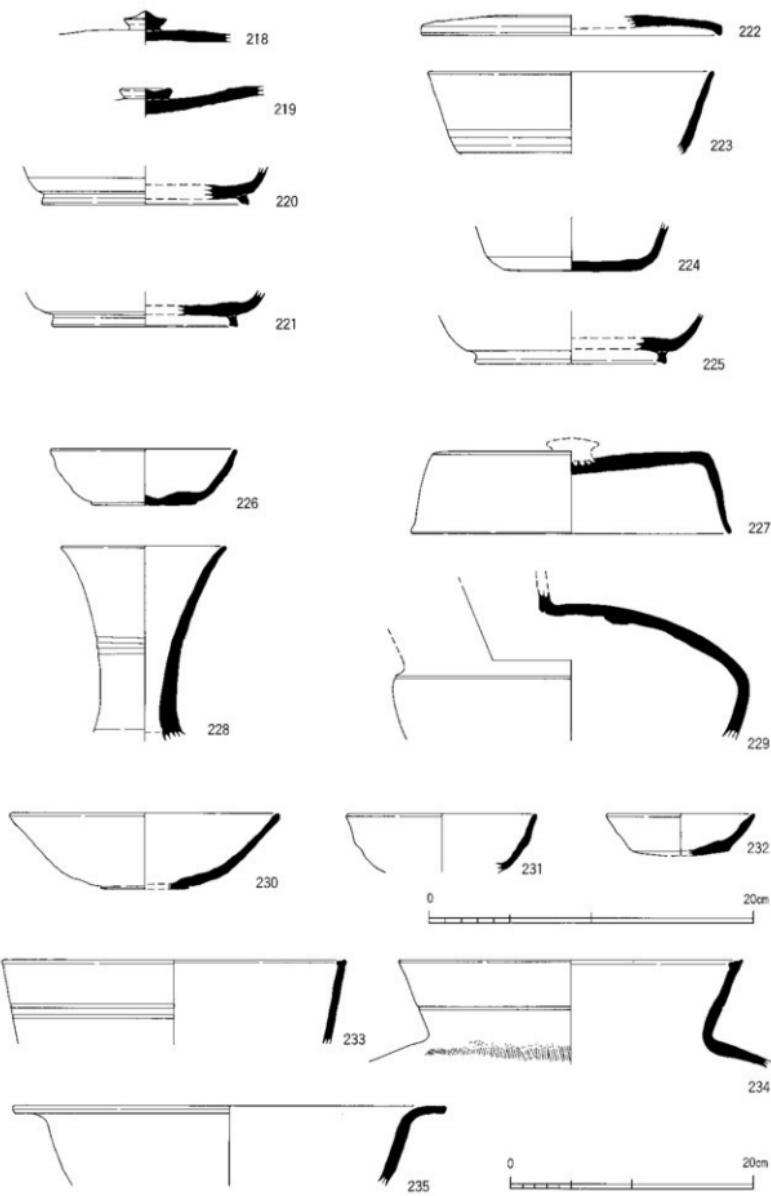
211



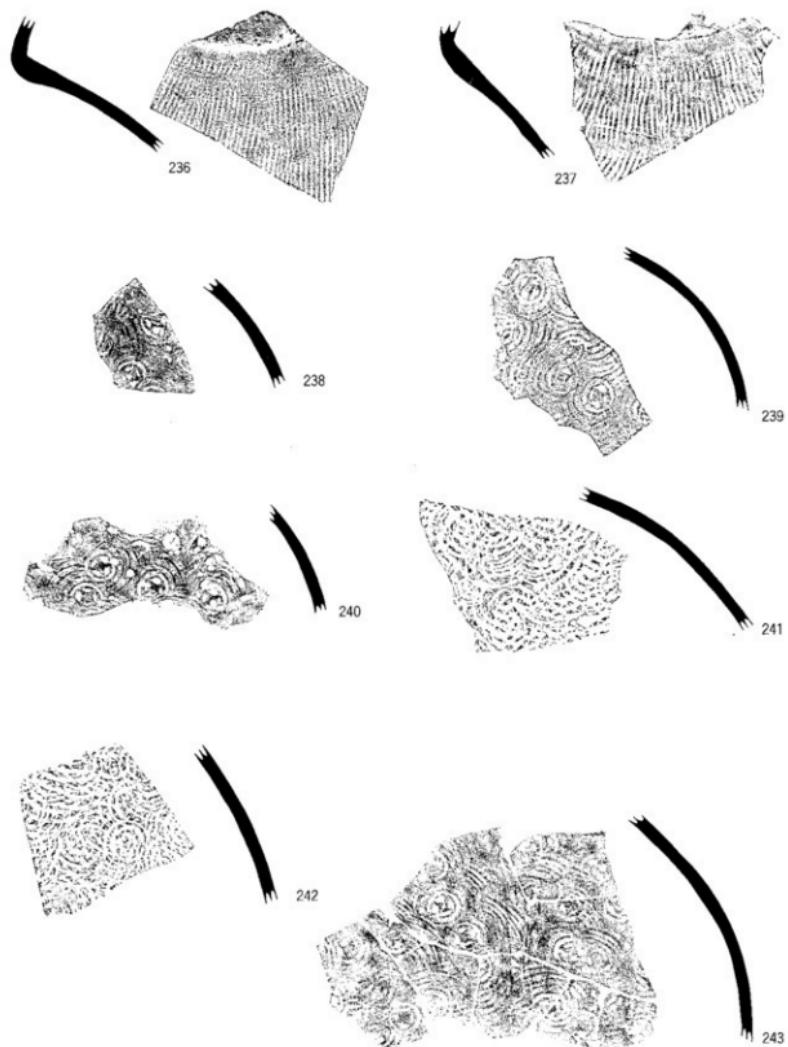
212



出土遺物 (10)

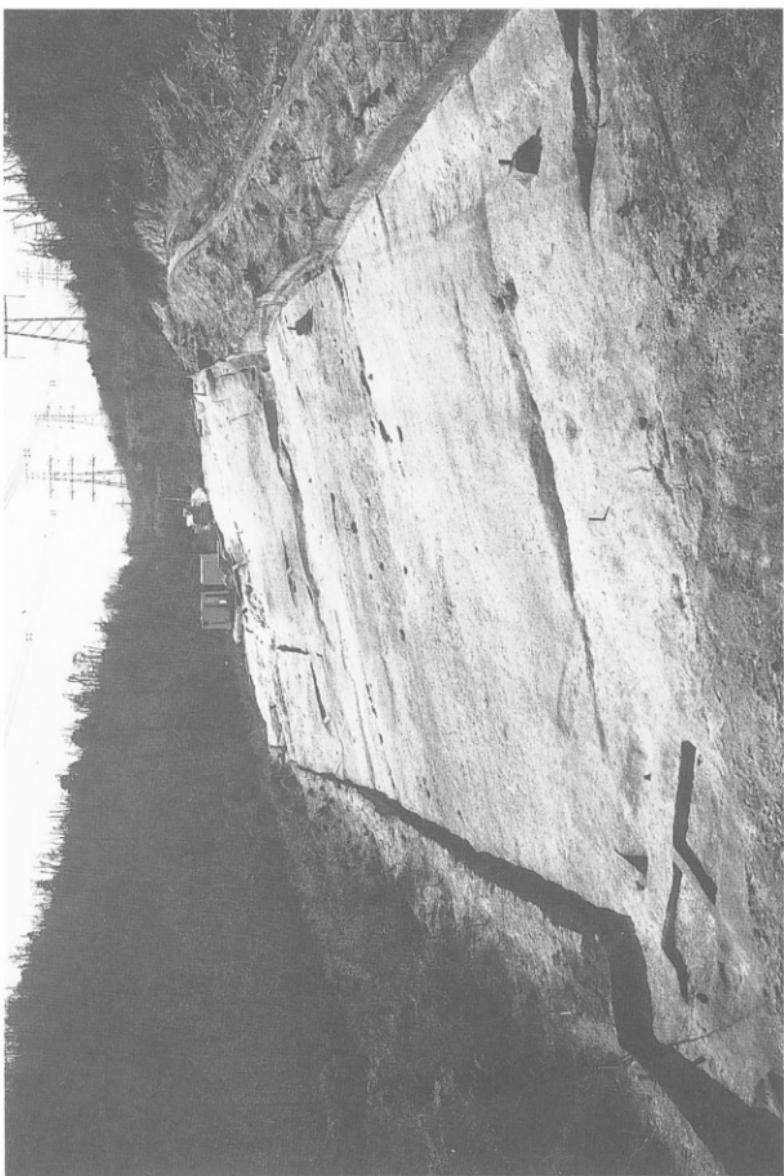


出土遗物 (11)



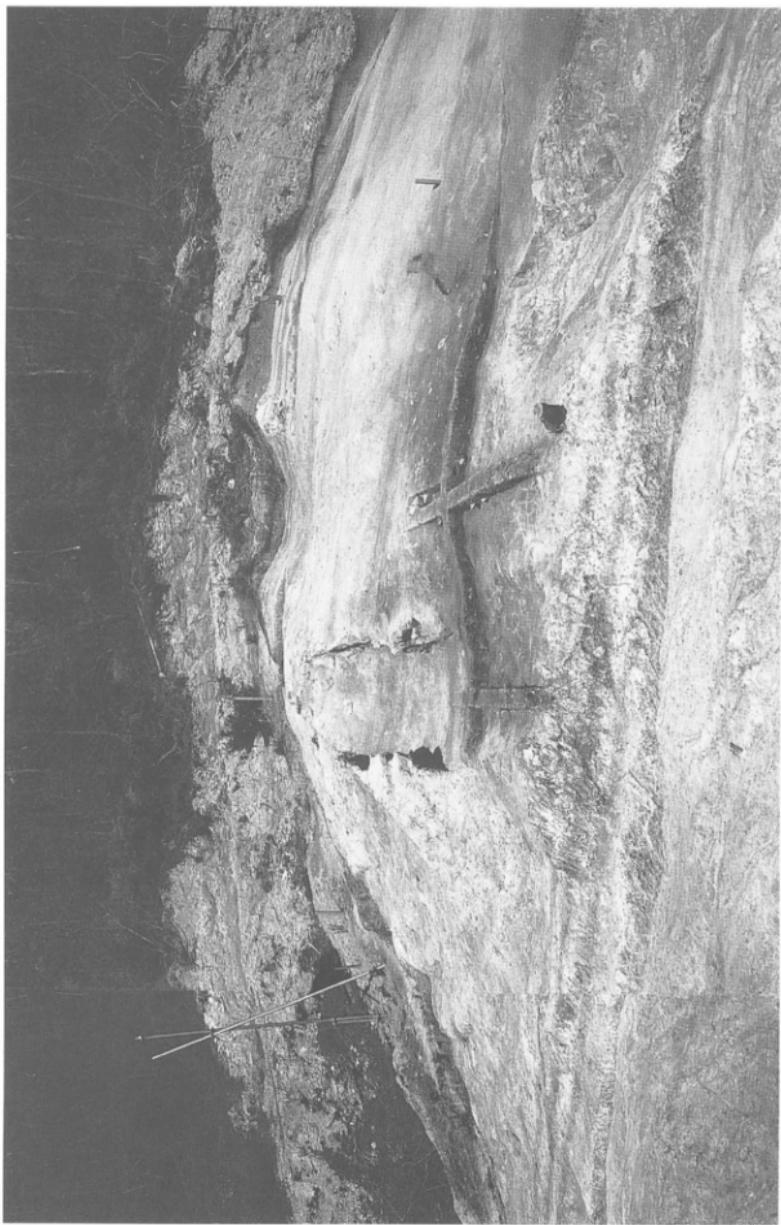
出土遺物 (12)

写 真 図 版



調査区 全景（東から）

写真図版 2
1区の調査

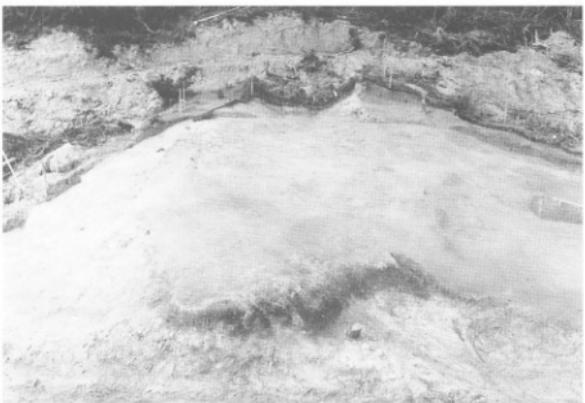


窯 完掘状況（南から）



竪体内第1面 遺物出土状況（南から）

写真図版4
1区の調査



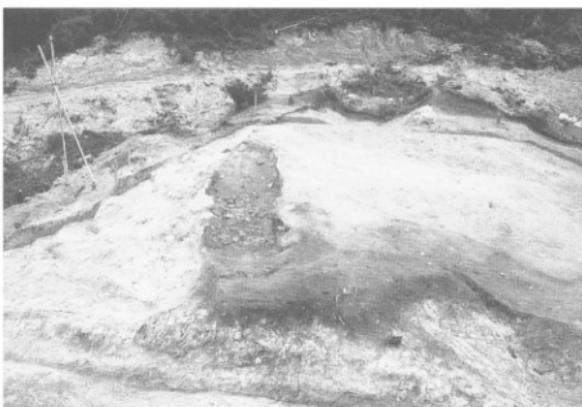
検出状況
(南から)



窯体 検出状況
(南から)



窯体 全景
(南から)



窯第1面
遺物出土状況
(南から)



窯第1面
遺物出土状況
(南から)



窯第1面
遺物出土状況
(南から)

写真図版 6
1 区の調査



窯第 2 面
遺物出土状況
(南から)



窯第 2 面
遺物出土状況
(南から)



窯第 2 面
遺物出土状況
(南から)



窯体内
1・2区間土層断面
(西から)



窯体内
3・4区間土層断面
(西から)



窯体内
5・6区間土層断面
(西から)

写真図版 8
1区の調査

窯1～2・3～4
区間土層断面
(南から)

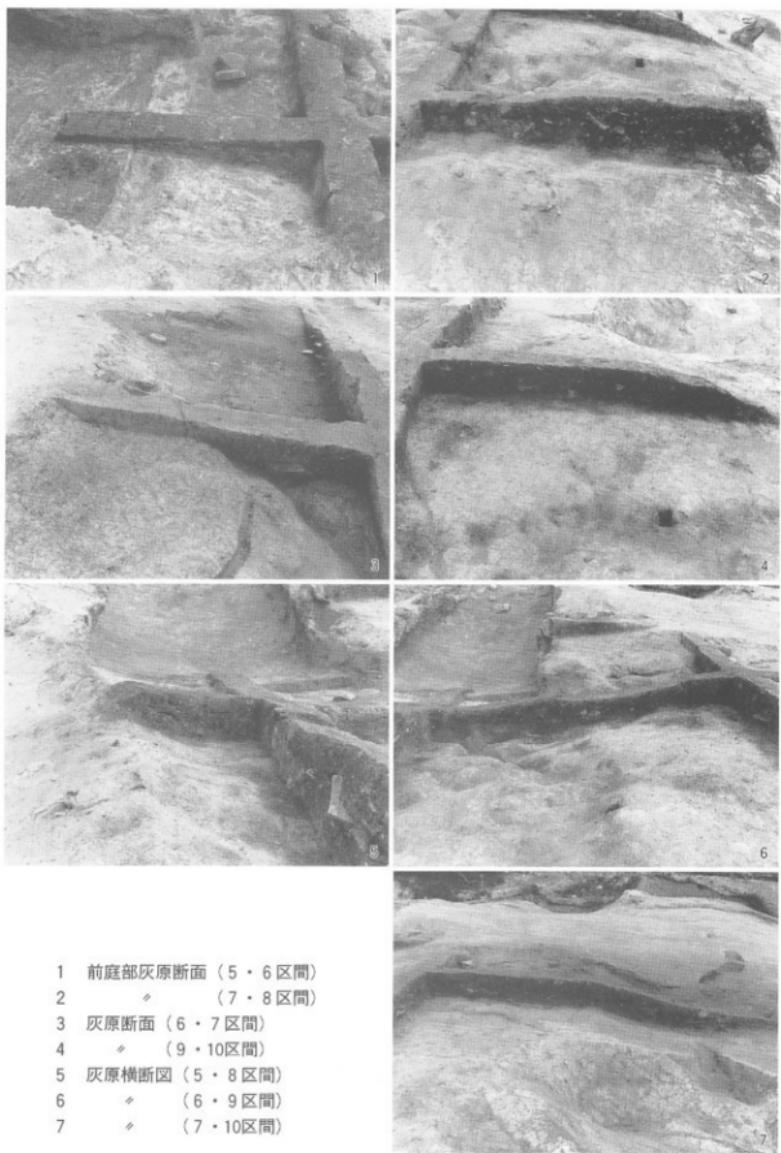


窯3～4・5～6
区間土層断面
(南から)



窯 断ち割り状況
(南から)

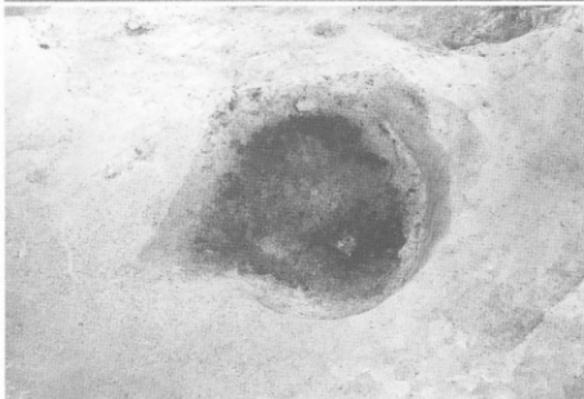




写真図版10
1区の調査



灰原内土掘
(北から)

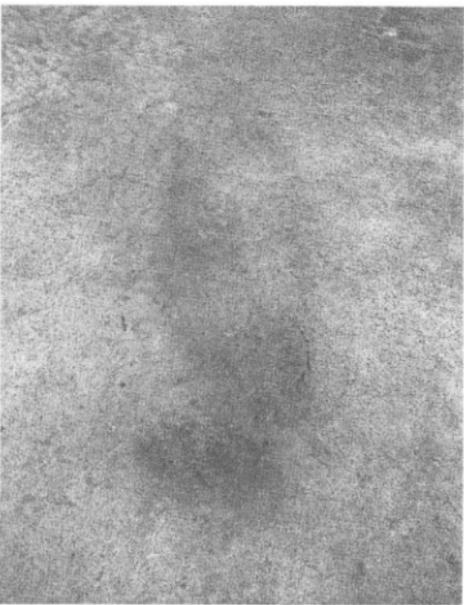


灰原内土掘
(北から)



灰原内土掘
(南から)

SK01
出土状況
(南から)



SK01
完掘状況
(南から)



写真図版12
1区の調査



SK04～07
完掘状況
(西から)



SK04
完掘状況
(南から)



SK06
土層断面
(北から)



SK06
完掘状況
(北から)



SK06
完掘状況
(南から)

写真図版14
2区の調査

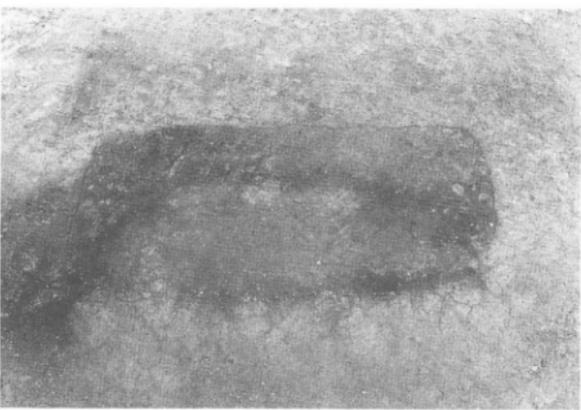


S K11・12
出土状況
(西から)

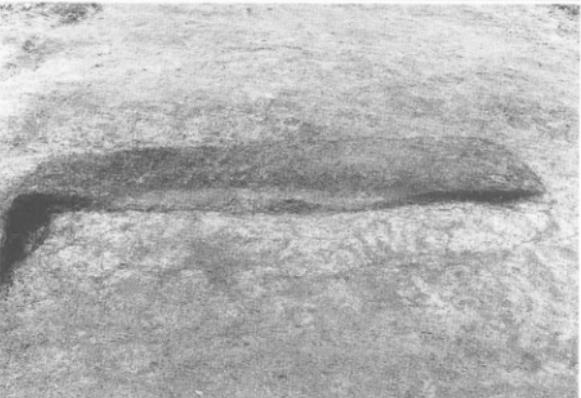


S K11・12
完掘状況
(西から)





SK09
出土状況
(東から)



SK09
土層断面
(東から)



SK09
完掘状況
(東から)



3



4



7



8



9



11



12



13



15



17



20



21



23



25



27



33



44



45



48



49



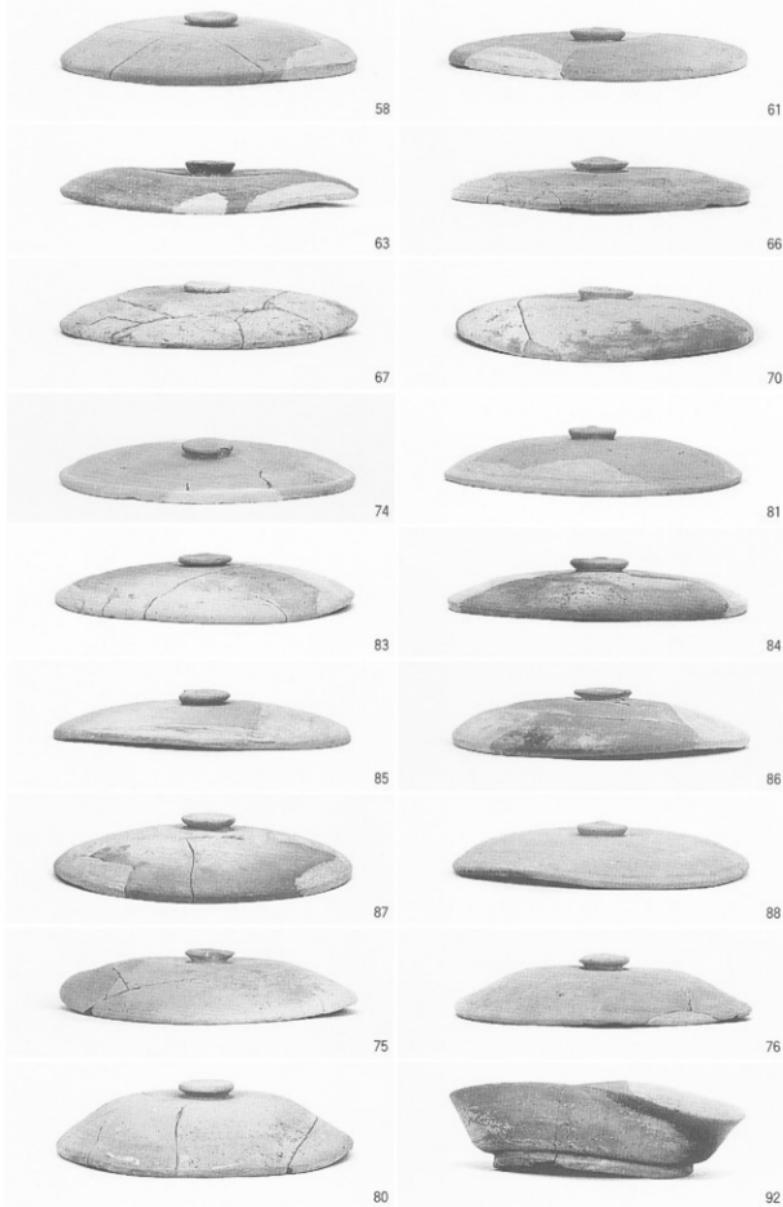
52



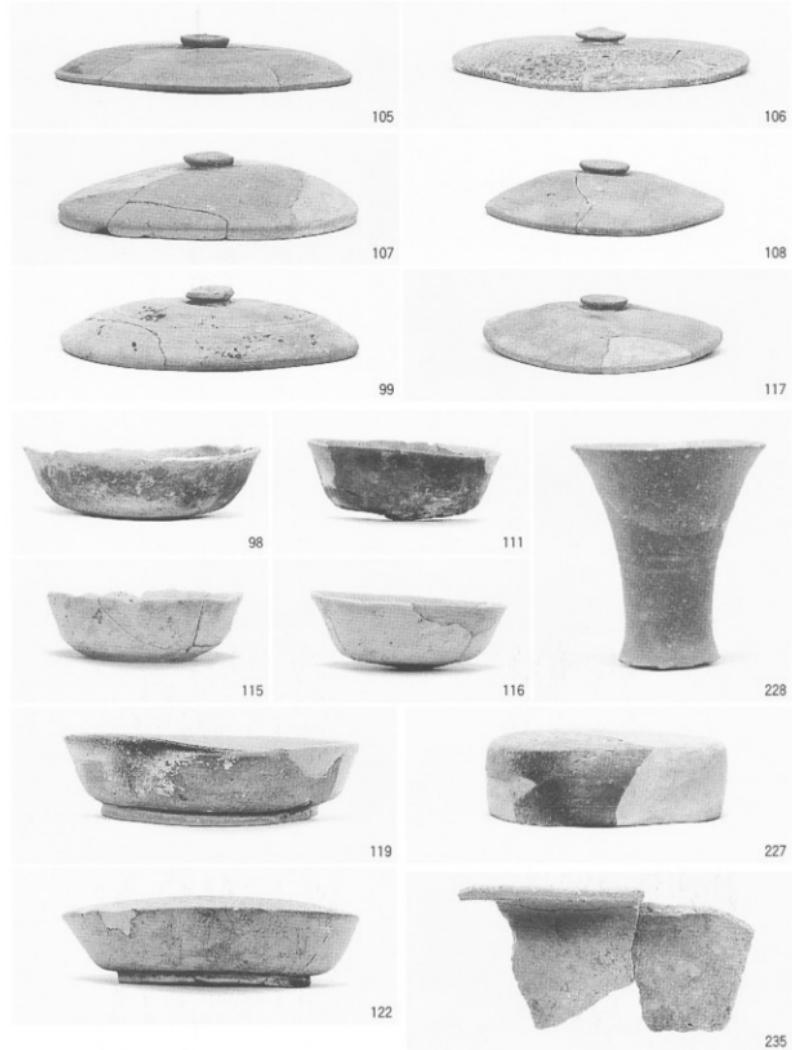
55



56



写真図版18
1区の調査





155



171



156



172



160



174



163



179



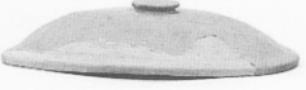
169



178



183



180



1275



148



130



143



184

写真図版20
1区の調査



192



194



209



199



203



198



204



211



212

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しらさわはなれやまいせき					
書名	白沢放山遺跡（白沢6号窯）					
副書名	山陽自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告					
シリーズ番号	第175冊					
編著者名	吉誠雅仁・中村 弘					
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所					
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 電話078-531-7011					
発行年月日	西暦1998年（平成10年）3月31日					
所 取 遺 跡 名	所在地		コード		北緯	東經
			市町村	遺跡調査番号		
白 沢 放 山 遺 跡	兵庫県加古川市上荘町白沢・ 鳥釜山			第1次全面調査		
				第2次全面調査		
調査期間			調査面積	調査原因	種別	
(第1次全面調査)	平成6年2月1日～ 平成6年3月25日			山陽自動車道 建設事業	生産遺跡 (窯跡)	
(第2次全面調査)	平成6年5月30日～ 平成6年6月22日					
主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
奈良時代	須恵器窯・土坑	須恵器	土坑は炭土坑がほとんど			

兵庫県文化財調査報告 第175冊

加古川所在

白沢放山遺跡（白沢6号窯）

山陽自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078（531）7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL 078（341）7711

印刷 友交印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4-5

TEL 078（303）0088
